中国禅宗寺院で詠まれた題詩と「境致」の関係

The relation between poetry made at Zen Buddhist temples in
China and the *Kyochi*

平出美玲

HIRAIDE Mirei

Key Words : 1. 禅宗寺院 2. 境致 3. 十境

1. Zen Buddhist temples 2. poetry of Zen Buddhism 3. *kyochi*

摘要

日本の禅宗寺院で伝統的に選定が行われてきた「境致」や、それに伴って詠まれた「十境詩」は、南宋五山制度を導入した時に中国禅宗文化の一つとして日本でも知られるようになったと考えられている。これまでに成された「境致」に関する先行研究でも、中国禅宗寺院の影響を受けて日本でも「境致」選定や「十境詩」作成が行われるようになったという解釈がされている。そこで本稿では中国で編集された地方誌『中国仏寺志彙刊』を史料とし、中国に於ける「境致」選定や「十境詩」の実態を調査・整理した。それにより、これまで漠然と中国禅宗寺院と考えられてきた「境致」選定の起源を、より明確にする事ができると考えた。その結果、日本で編纂された、『扶桑五山記』や『和漢禅刹次第』に記載されている「中国禅宗寺院の境致」とみなされている題が、中国で編纂された『中国佛寺志彙刊』の内容とは一致していないことが明らかになった。

Abstract

The Zen sect was introduced in Japan at the end of the twelfth century, and spread systematically from epoch Kamakura (1185-1333). The authority of this epoch, who had just taken its power, introduces a Chinese administrative system to control Zen Buddhist temples, that is about the Five Mountain

System “*Gozan-seido*” for the object to use politically this sect. The introduction of the system from China brought consequently a Zen culture developed in the Chinese Zen Buddhist temples around the Five Mountains temples of the Southern Song Dynasty (1127-1279), and it gave great influence in the development of all areas of Japanese culture at later periods. The famous literature of Five Mountain System “*Gozan-bungaku*” is the domain in specialty of a Chinese culture that developed and flourished all along the Kamakura and Muromachi periods. In these works, which were written by monks, many poems were inserted among which we have poems “*Jikkyo-shi*”. We thought long time as the poesy of “*Jikkyo-shi*” is a genre which was introduced in parallel with other cultural areas of China, and we have not enough studies yet to certify that definition. To confirm the definition, we study the text published in China in the time of the Ming (1368-1644) and Qing (1616-1912), about the history of Buddhist temples in China which is “中国 仏 寺 志 彙 刊” (the History of Buddhist temples in China). We can consider that the text is valid to see the propagation of the concept “*kyochi*” to the community of Zen sect in China of the time of the apogee of the Five Mountains

temples, because the definition of previous studies on the same subject was based also about the contents of this text.

In this study, I collected examples of poetry in the form of decade “*Jikkyo-shi*” mainly in the texts on five major temples that these are Jing shan si, Ling yin si, Tian tong si, Jing ci si, and A Yu wang shan si. Then I classify the poems and analyze several ways to determine the historical meaning of the concept “*kyochi*” in Zen culture whose construction of the Japanese garden the next few times is strongly influenced. And I found, in effect, that there are some differences between the texts written in Japan and in China.

1. はじめに

12世紀末に栄西が日本に伝えた禅宗が、日本で本格的に広まったのは鎌倉時代以降である。時の鎌倉幕府は禅宗を公の宗教として利用するために、南宋の官寺制度を導入し五山十刹を制定した。同時に取り入れられた中国禅宗寺院文化は、その後の日本文化に多大な影響を与えることとなった。その中で、各寺院において禅僧によって選定される「境致」や、それに対して詠まれた「十境詩」についても、五山制度と共に日本にもたらされた中国禅宗文化の一つであると考えられてきた。禅宗寺院の境致についての先行研究は複数存在するが、「境致」について言及している最初の論考は、1934年に出版された外山英策の『室町時代庭園史』である。この研究は室町時代の庭園について、論文で一貫して「境致」や「十境」の考察を行い、この時代の庭園文化における「境致」や「十境」の重要性を示唆している。しかし、外山英策の研究は日本の事例だけを対象としているために、その手本となったとされる中国での事例についての考察が行われていない。そこで主だった先行研究の中で、特に中国禅宗寺院の境致について言及している田島柏堂、関口欣也、蔡敦達の三氏の論文を挙げ、以下にその内容と本研究と関連する問題点についてまとめた。

田島柏堂は「天童山十境」と禅語散策 - 「拜登」・「警策」考 - の中で、永平寺十四世建槩（1415-1474）が記した道元の伝記『建槩記』の中に記載されている「天

童山十境」（異本有り）について、建槩が何を拠り所にして収録したのか不明であるとして、その究明を試みている。参考としているのは『五山十刹図』（金沢市大乘寺所蔵）の「天童山景德寺伽藍配置図」と『天童寺志』（『中国佛寺志』）で、『建槩記』に記載されている十境の題を各本の文章と照らし合わせ、十境の所在地を明確にする試みを行っている。この十境の10題のうち、「登閣」が『天童寺志』『天童寺續志』に見えないことを明らかにし、「登閣というのは、何々閣という楼閣（高層の建築物）に登って、外を眺めた絶景を称し、閣は千仏閣のことを指しているように推考されるⁱ」と述べている。田島はさらに「十境」の語彙について、「「十境」という題名でまとめた記録は、『寺志』、『續志』あるいは中国の語録などを検索するも、宋・元・明の間には見出すことができないⁱⁱ」とし、『建槩記』に初めて見出されると述べている。そして、「「十境」もおそらく禅師が在宋中または帰国後、選定命名して何かに書き留めてあったのを、建槩が採録したものと推測されるⁱⁱⁱ」と述べている。ここでわかることは、田島柏堂が「十境」という題名でまとめた記録が中国語の文献には見出されないと明記していることである。これは本論文でも主題として検証した事柄である。

また関口欣也は論文「中国江南の大禅院と南宋五山」で、記録に残っている中国禅宗寺院の境致の所在とその特質について言及している。この中で関口は、「『大宋国諸寺次位』をみると、境致はその寺の建築や自然環境の勝地および霊跡などからなり、江南の大禅院では自然的、人工的、宗教的、歴史的環境の総合美が尊ばれていたことが知られ、山を控えた占地を反映して前山や後山を境地に数え、境致と江南の山水との深い関係を示している^{iv}」と述べ、境致がどのようなものかを説明している。また、境致の概念が何時頃生じたのかについては、成熟過程はまだ明らかではないとしながらも、唐代に遡るとしている。また、北宋時代の作例として「舒亶が天童寺を詠んだ詩」の題を10種挙げ、「十境」と述べている。しかし、この題詩は舒亶の著作『乾道四明図経』において「天童十題」の名で記載されているものである。そのため、この10題の詩が「十境詩」として定義できるかについては疑問が残る。また「中世五山伽藍の源流と展開」という論文では、境致について「五山をはじめと

する禅宗寺院では禅宗の自然観にもとづき、周囲の自然環境を尊重して、これと伽藍との総合的な景観美を境致という言葉で表現し、大伽藍から小禅院まで、寺の内外の景観を構成する山や池および諸堂を境致に数えた。そして境致は漢詩で文学的に理想化され、環境の美化をいっそう増進した^{vi}と説明し、日本におけるそれらの源流は「南宋から元の五山を筆頭とした大禅宗寺院にある」と述べている。また『扶桑五山記』の「南宋国諸寺次位」をもとに「境致はその寺の建築や自然環境の勝および霊跡などからなり、江南大禅院では自然的、人工的、宗教的、歴史的環境の総合美が尊ばれていたことが知られ、山をひかえた占地を反映して前山や後山を境致に数え、江南の山水と境致の深い関係を示している。そして北宋ころから適当な数の境致（多くは十）を選んで詩に詠われ、景観美が詩で文学的に理想化された」と述べている。また、境致の対象となるものは、寺院中心部の建築群よりも、寺ごとに変化に富む周辺の自然景観とそれを生かした亭などであるとしている。そして「境致の概念は「十景」などよりきめがこまかく、日本の禅院の環境形成にきわめて大きな影響をおよぼした^{vii}」と説明している。このように関口は、境致の概念が宋代の江南禅宗寺院から日本に伝わったとしている。しかし本論文で検証しているように、その根拠となる文献『扶桑五山記』に記載されている南宋五山各寺院の境致は、中国で編纂された文献『中國佛寺志』の中には記載されていなかった。そのため今後のさらなる検証が必要であると考えます。

蔡敦達は「日本の禅院における中国的要素の摂取：十境を中心として」で、境致選定が中国でいつ頃はじめたのか、そして日本に取り入れられてからどのように発展したかを考察している。そして南宋五山を中心とする中国禅宗寺院で行われていた境致の選定は、当時の文人がその邸宅や別荘の庭園に対して 10 の景物を選んで詩に詠むという慣習に影響を受けて発達したものであり、これら「十詠」「十題」という詩の形式が禅宗寺院において「十境」へと発展したと述べている。その根拠として日本人入元僧の別源円旨（1294-1364）の『南遊集』に収録されている「和雲外和尚天童十境韻」を挙げ、この偈頌が雲外雲岫の偈頌の和韻詩であることから、天童寺十境は雲外雲岫によって選定されたものであろうと述べている。さらに、この天童寺十境の 10 題は全て『扶桑五

山記』の境致の記載の中に含まれていることから「十境の選定は南宋以降、五山をはじめとする中国の禅院で行われていたことがわかる^{viii}」と結論付けている。次に、この結論を裏付けるための例として、舒宣（1041-1103）の『乾道四明図經』に載る「天童十題」を挙げ、「天童十題」のうちの 5 題が先の「天童十境」と重なることを指摘し、「文人・禅僧を問わず、同じ主題を詩・偈に書いたことは、直接ではなくとも両者の間に交流のあったことが窺われる。（中略）禅僧による全員の十境選定は、こうして文人から影響を受け、また、かれらとの交流を通じて作り出されたものと思われる^{ix}」としている。しかし、先の関口欣也の論文の項でも述べたように、「十題」と「十境」を単純に同じものと見做してもよいかという疑問が残る。詠、題、景、境の違いについて蔡敦達は、同じ 10 種の題詩に対して史料毎に詠が使われていたり景が使われていたりして、一定ではないことから「十詠」「十題」が「十景」に変化するプロセスはさらに「十境」へとつながるもので、「十境」は「十詠」「十題」を踏襲したものと考えられる^xと説明している。また当時流行していた「八景図」や「八景詩」も十境における景観選定に影響を及ぼしたと述べている。そして中国の禅院で行われていた境致選定の根拠となる史料として、『扶桑五山記』及び別源円旨の『南遊集』が挙げられている。しかし、これらの史料はどちらも日本人によって書かれた日本の文献である。そうであるならば、中国における事柄についての根拠を求める時に、日本で書かれた文献史料と中国で書かれた文献史料との内容に異なりが有る場合、中国の文献の内容を考慮に入れないで結論を出すことはできない。また、舒宣の「天童十題」についても、関口欣也の項で述べた通り、「十題」と「十境」を同じものと見做してよいのかという検証を行う必要があると考えた。

境致そのものを論じている最初の論文は、玉村竹二の「禅院の境致」である。ここでは主に、日本における「境致」選定についての考察が行われている。中国禅宗寺院について言及された箇所では、日本同様に数多くの十境が設定されていたらしいと述べた上で、その根拠として『和漢禅刹次第』や『扶桑五山記』と共に「『天童寺志』をはじめ、中国の各寺志類にも記されてゐる所である^{xi}」と、『中國佛寺志』の記述を挙げている。

このように、先行研究の中で度々言及されている「中国禅宗寺院の境致」について、実際に中国の文献を調べることで、その有無も含めて「境致」とは如何なるものであったのかを明らかにしたいと考えた。史料とする文献は、中国で明代から清代にかけて数多く編纂された地方志の一種である『中国佛寺志彙刊』を使用した。この文献は、上述したように田島柏堂や玉村竹二が、中国禅宗寺院における「境致」選定の有無の根拠として言及していることから、史料として有効であると考えた。『中国佛寺志彙刊』の中で、南宋五山寺院についての文献は『径山志』、『武林靈隱寺志』、『雲林寺志』、『天童寺志』、『勅建淨慈寺志』、『明州阿育王山志』、『明州阿育王山續志』の7冊である。本論文では、主にこれら5つの各寺院で詠まれ、編纂された詩偈の中からひとまとまりになった題詩を上述の文献から探し出し、その種類を詩形や題の違いにより分類した。さらに詩の題が、『扶桑五山記』や『和漢禅刹次第』といった日本の文献における記述とどの程度共通しているかを調べた。

2. 南宋五山寺院において詠まれた題詩

(1) 萬寿寺

興聖萬寿禅寺は径山寺の主寺とされている。『径山志』巻九に「偈詠」、巻十に「名什」の章が設けられていたが、これらの章には一定数のまとまった題詩は収録されていなかった。ただし『扶桑五山記』の萬寿寺の項に記載されている20種類の題（「清涼法海（山門）」「龍井」「天下徑山」「五髻峯」「龍淵室」「淨髮閣」「不動巖」「不動軒」「凌霄閣」「含暉亭」「御愛峯」「喝石巖」「楞伽室」「流止亭」「福地」「靈雞塚」「鉢盂峯」「碁盤石」「萬年正續院」）のうち、5種類の題を冠した詩が、それぞれ単独で収録されていた。巻九の「偈詠」には、原肇の「喝石巖」（七言律詩）、龍大淵の「含暉亭」「凌霄閣」（七言律詩）と、超宗の「喝石」「盤陀石」（七言絶句）が収録されていた。また巻十の「名什」には、范至能の「凌霄庵」（五言排律）、徐懋弁の「喝石巖」（五言絶句）、黄汝亨の「題靈雞塚」「題喝石巖」（五言絶句）が収録されていた。「偈詠」と「名什」の両章合わせると、「喝石（巖）」4首、「凌霄（閣・庵）」2首、「含暉亭」1首、「盤陀石」1首、「靈雞塚」1首で、「喝石」が最も多い。これらの詩を分類したものが

以下の表である。右に作者名と詩の形態を記載した。

『径山志』に収録されていた「『扶桑五山記』記載の題を冠する題詩の数と形態

原肇 七言律 詩	喝石巖				
龍大淵 七言律 詩		凌霄閣	含暉亭		
超宗 七言絶 句	喝石			盤陀石	
范至能 五言排 律		凌霄庵			
徐懋弁 五言絶 句	喝石巖				
黄汝亨 五言絶 句	題喝石 巖				題靈雞 塚
	4 首	2 首	1 首	1 首	1 首

以上の5題の詩を形態から分類すると、七言律詩が3題、七言絶句が2題、五言排律が1題、五言絶句が2題（そのうちの1題は重複）である。このことから、これらの詩は、題が『扶桑五山記』に収録されているうちの5題ではあっても、同種類ひとまとまりの題詩とは考えられない。

また「偈詠」の章内に、祖銘によって詠まれた5種類の峰に対する題詩がまとめて収録されていた。いずれも五言古詩（六句）で「堆珠峰」「大人峰」「鵬博峰」「宴坐峰」「朝陽峰」の5題であるが、これらの5題は『扶桑五山記』には記載されていない。

(2) 靈隱寺

『靈隱寺志』には7首のまとまった題詩が収録されており、その題詩がもともと10首あったうちの7首を収録

している由が記載されていた。しかしそれ以外に「境致」や「十境」の記載はなかった。この7首は『靈隱寺志』巻八「詩詠」の五言古詩を集めたなかに収録されていた。それは梅詢（詢知和尚）が詠んだもので、「有靈隱寺詩十首勒石冷泉亭上今在七首^{xii}」と記載されているように、もともと10首の詩が石に刻まれていたが現在はそのうちの7首が残っている。詩は八句の古詩で「本寺（靈隱寺）」「冷泉亭」「飛來峰」「曲水亭」「龍泓洞」「蓮華石」「猿呼洞」の7題である。この7題を『扶桑五山記』に記載されている題と比較すると、『扶桑五山記』に記載されているのは「蜚來峯」「直指堂」「冷泉亭」「猿呼洞」「石蓮峯」「北高峰」「合澗橋」「壑雷亭」「鷲嶺」「九里松徑」「蓮峯堂」「梅檀林」の12題であった。この題の中で「靈隱寺詩十首」中の7首に含まれているのは「冷泉亭」「飛來峰」「猿呼洞」の3首だけであった。

『靈隱寺志』の7首と『扶桑五山記』記載の題の比較

『靈隱寺志』10首のうちの7首	『扶桑五山記』
「本寺（靈隱寺）」「曲水亭」「龍泓洞」「蓮華石」	「直指堂」「石蓮峯」「北高峰」「合澗橋」「壑雷亭」「鷲嶺」「九里松徑」「蓮峯堂」「梅檀林」
「冷泉亭」	「冷泉亭」
「飛來峰」	「蜚來峯」
「猿呼洞」	「猿呼洞」

『靈隱寺志』の題詩は、もともと10首あったうちの7首なので、単純に『扶桑五山記』の12題と比較することは難しいが、それでも7題のうちの3題しか共通しないというのは決して多いとは言えない。靈隱寺周辺の景勝地の中でも特に「冷泉亭」「飛來峰」「猿呼洞」は現代に至るまで著名であることから、これらの題詩が詠まれた当時から広く知られた名勝地であったことが、詩に詠まれた理由とも考えられる。

『靈隱寺志』巻八は、「詩詠」を年代別ではなく、詩の形態別に収録した巻である。ここには五言古詩31首

（このうちに上記の7首を含む）、七言古詩8首、五言律詩46首、七言律詩54首、五言絶句18首、七言絶句38首、五言排律8首がそれぞれ収録されていた。『靈隱寺志』に収録されていた題詩の中から上述の『扶桑五山記』に記載された12題と同じ題の詩を抜き出すと、いずれの形態にも『扶桑五山記』に記載されている題の詩が含まれていたが、その種類は12題のうちの6題だけであることがわかった。それ以外に「靈隱寺」の題詩が五言絶句以外の全ての形態で詠まれていた。それぞれの題を形態ごとにまとめると以下のようになった。

詩の形態で分類した『靈隱寺志』記載の題詩

五言古詩	七言古詩	五言律詩	七言律詩	五言絶句	七言絶句	五言排律
飛來峰 (4首)		飛來峰 (4首)	飛來峰 (3首)	飛來峰 (1首)	飛來峰 (6首)	飛來峰 (1首)
冷泉亭 (1首)		冷泉亭 (3首)	冷泉亭 (1首)	冷泉亭 (2首)	冷泉亭 (8首; 3首は「冷泉」)	
北高峰 (2首、うち1首は「上北高峰」)	北高峰 (1首)	北高峰 (1首)	北高峰 (2首)	北高峰 (1首、「遊北高峰」)	北高峰 (1首)	
			呼猿洞 (1首)		呼猿洞 (5首)	
			九里松 (6首)	九里松 (1首)	九里松 (1首)	

				合澗橋 (1 首)		
「靈隱 寺」(4 首)	「靈 隱 寺」 (1 首)	「靈 隱 寺」 (3 首)	「靈 隱 寺」 (9 首)		「靈隱 寺」(4 首、 うち 1 首 は 「靈隱 寺石」)	「靈隱 寺」(4 首、 うち 2 首 は 「遊靈 隱寺」、 1 首は 「宿靈 隱寺」)

上の表にまとめた題詩と、上述の梅詢が詠んだ7題とを比較すると、共通している題は「本寺（靈隱寺）」「冷泉亭」「飛來峰」「猿呼洞」の4題であった。ただし「本寺」或いは「靈隱寺」の題は『扶桑五山記』の12題には含まれていない。

それぞれの形態で、同作者が複数の題詩を詠んでいたが、『扶桑五山記』に含まれている題詩だけに絞ると、同作者で3種類の題を詠んでいるものが「七言絶句」に1例あった。しかしその他は、同作者によって詠まれている題詩は2種類までであった。

「五言古詩」に10首中7首が収録されていた梅詢（詢知和尚）については『靈隱寺志』巻五下の「歴代人物」の章に「梅詢字堯臣知仁和縣事有武陵十詠詩刻石冷泉亭上^{xiii}」と記載されていた。これによれば、梅詢は仁和県（杭州市にかつて存在した県）の長官で、彼の詠んだ「武陵十詠詩」が冷泉亭の傍らに在った石に刻まれていたということがわかる。しかし武陵が湖南省に在る景勝地を指している可能性があるため、ここに記載されている「武陵十詠」が「靈隱寺詩十首」と同じものであると断定することができない。上述の通り、この「靈隱寺詩十首」のうちの7首は「本寺（靈隱寺）」「冷泉亭」「飛來峰」「曲水亭」「龍泓洞」「蓮華石」「呼猿洞」で、『扶桑五山記』の12種類に含まれるのは「冷泉亭」「飛來峰」「呼猿洞」の3首だけである。

靈隱寺については『靈隱寺志』と共に『雲林寺志』においても取り上げられている。『雲林寺志』巻六は「詩

詠」に充てられており、3種類のまとまった題詩が収録されていた。1つ目は、郭祥正という同一作者による五言絶句詩12首で、「北高峰塔」「石門澗」「靈隱浦」「合澗橋」「猿呼洞」「葛塢」「韜光菴」「西菴」「臥犀泉」「青林洞」「白沙泉」「翻經臺」の題詩が記載されていた。また、李考光の詠んだ「靈隱十詠」と、貝瓊の詠んだ「靈隱十景」という2種類の題詩が収録されていた。この2つの題詩は、いずれも五言律詩で詠まれた10首のまとまった題詩という点で共通しているが、それぞれ10題のなかで同じ題は3首しかなかった。「靈隱十詠」の題は「靈隱寺」「冷泉亭」「蓮花峰」「飛來峰」「鍊丹井」「猿呼洞」「水臺盤」「翻經臺」「高峰塔」「龍泓洞」であった。「靈隱十景」の題は「蓮花峰」「龍泓洞」「葛洪井」「合澗橋」「連巖棧」「飯猿臺」「夢謝亭」「理公巖」「題名塔」「猿呼洞」であった。共通しているのは「蓮花峰」「猿呼洞」「龍泓洞」の3題であるが、これらは同じ韻を持っているわけではなかった。

次に、これらの題を先程の『靈隱寺志』の場合と同じように『扶桑五山記』に記載されている12種類の題と比較してみる。『扶桑五山記』の12題は「蜚來峯」「直指堂」「冷泉亭」「猿呼洞」「石蓮峯」「北高峰」「合澗橋」「壑雷亭」「鷺嶺」「九里松徑」「蓮峯堂」「栴檀林」であるので、最初の五言絶句詩12首の題詩と比較すると、完全に共通しているのは「合澗橋」と「猿呼洞」の2首で、『雲林寺志』の「北高峰塔」は『扶桑五山記』の「北高峰」と非常に近いことから、合計で3題あると考える。「靈隱十詠」では、完全に共通しているのは「冷泉亭」「飛來峰」「猿呼洞」の3首で、「靈隱十詠」の「高峰塔」が『扶桑五山記』の「北高峰」に近い。また「靈隱十景」では、共通するのは「合澗橋」と「猿呼洞」の2首だけであった。以上のことを表にして以下に示した。

『雲林寺志』記載の題詩と『扶桑五山記』記載の題の比較

扶桑五山記	十二首	靈隱十詠	靈隱十景
呼猿洞	猿呼洞	猿呼洞	猿呼洞
北高峰	北高峰塔	高峰塔	
合澗橋	合澗橋		合澗橋

冷泉亭		冷泉亭	
蜚来峯		飛来峰	
直指堂			
石蓮峯			
壑雷亭			
鷲嶺			
九里松徑			
蓮峯堂			
梅檀林			
		蓮花峰	蓮花峰
		龍泓洞	龍泓洞
	石門澗	鍊丹井	葛洪井
	葛塢	水臺盤	連巖棧
	韜光菴	翻經臺	飯猿臺
	靈隱浦	靈隱寺	夢謝亭
	西菴		理公巖
	臥犀泉		
	青林洞		
	白沙泉		
	翻經臺		

以上のことから『扶桑五山記』で挙げられている題は、必ずしもその寺院の境致として広く認識されていたというわけではないことが考えられる。「靈隱十詠」や「靈隱十景」といった「十境」詩に類似した題詩は存在しているが、10題に選定された景物は、詠み手によって様々で、同じ題の方が少ないことがわかる。

(3) 天童寺

『乾道四明図経』巻八に「天童十題」として舒亶(1041-1103)の詩が収録されている。『天童寺志』にはこの舒亶の詩が13首収録されていたが『乾道四明図経』とは異なり、まとまった題詩として記載されてはいなかった。

『天童寺志』巻之一「山川攷」は、天童寺の景勝地について述べられた章であるが、景勝地ごとにその説明があった後、景勝地に対して詠まれた詩が時代を追って収録されている。この章に舒亶の詩は8首収録されており、そのうちの七言絶句で詠まれた6首が「天童十題」詩中

の6首と同様の詩であった。残る2首は、七言律詩1首と七言排律1首で、天童寺山号の「太白山」について詠んだものであった。8首とも、その詩自体には題名がついていなかったが、出版社が編集した本の目次には「山川攷」で述べられている景観それぞれに表題が付けてあり、舒亶の6首は「天童十題」と表題と詩がほとんど一致した。6首の表題は「太白峰」「玲瓏巖」「響石」「佛蹟石」「神龍霧」「虎跑泉」である。「天童十題」の中で上記の6首に対応するのは「太白峰」「玲瓏巖」「響石」「佛石」「龍池」「虎跑泉」であるが、この中の「佛石」「龍池」は表題中の「佛蹟石」「神龍霧」との題の類似や詩が同じであることから、それぞれ対応していることがわかる。

また、天童寺の建造物について述べた『天童寺志』巻之二「建置攷」に、天童寺の寺院周囲に建つ建造物に対して舒亶が詠んだ詩が4首収録されているが、その中の3首は、題がついていて『乾道四明図経』に収録されている「天童十題」詩中の3首と同じ題詩であった。残る1首は「山川攷」の章の場合と同様に、他の3首とは形態が異なり、七言律詩で詠まれたものであった。この章で「天童十題」と共通の3首は「臨雲閣」「春楽軒」「宿鷲亭」で、残る七言律詩の題は「蒙堂」であった。残る1首「太白庵」は『天童寺志』巻之九「轄麗考(附莊産)」に収録されていた。

『天童寺志』に収録されていた舒亶の詩は13首であったが、そのうち3首は「天童十題」に含まれるものではなく、形態も異なる詩であった。『天童寺志』には舒亶の「天童十題」詩は全て収録されていたが、10題まとまった形で記載されているわけではなかった。

以下に舒亶の題詩を表にまとめた。

『乾道四明図経』と『天童寺志』に収録された舒亶の題詩の比較

天童十題(『乾道四明図経』)	天童寺志
太白峰	太白峰
太白庵	太白庵
玲瓏巖	玲瓏巖
響石	響石
龍池	神龍霧

虎跑泉	虎跑泉
佛石	佛蹟石
臨雲閣	臨雲閣
春楽軒	春楽軒
宿鷺亭	宿鷺亭
————	太白山2首（律詩・排律）
————	蒙堂（律詩）

『天童寺志』巻之二「建置攷」の康熙五十二年（1713年）の中に十景詩が1種類収録されていた。これは「太白山十景詩」と題されており、釋元乗が詠んだものである。詩の形式は、瀟湘八景に倣った七言絶句の題詩が10首一揃いになっているものであった。題詩は「深徑廻松」「青關噴雪」「雙池印景」「西礪分鍾」「玲瓏天鑿」「太白生雲」「東谷秋紅」「南山晚翠」「平臺鋪月」「鳳岡修竹」の10首で、瀟湘八景に類似しており、瀟湘八景同様に季節毎の情景を表現した題詩が多い。この中で明らかに季節がわかるのは「青關噴雪」「東谷秋紅」「南山晚翠」「平臺鋪月」の4首であるが、残る6首も含めて自然の中の景観を詠んだ詩集であることは、瀟湘八景と共通している。これは、同じ10題の詩集という形式を取りながら、上記の「天童十題」の題詩とは明らかに異なる特徴である。

「太白山十景詩」と「瀟湘八景」の題の比較

太白山十景詩（七言絶句）	瀟湘八景
深徑廻松	瀟湘夜雨
清關噴雪	洞底秋月
雙池印景	煙寺晚鐘
西礪分鍾	遠浦歸帆
玲瓏天鑿	山市晴嵐
太白生雲	漁村夕照
東谷秋紅	江天暮雪
南山晚翠	平沙落雁
平臺鋪月	
鳳岡修竹	

また日本人入元僧の別源円旨（1294-1364）が留学先で記した『南遊集』には「和雲外和尚天童十境韻」の題詩

が収録されているが、『天童寺志』と『天童寺續志』に雲外雲岫の詩は記載されていなかった。また、雲外雲岫自身の語録にも十境は収録されていない。しかし雲外雲岫は、別源円旨の2つの著作に序文を残していることがわかっている。『南遊集』のための序文には「南遊集序、名山勝境、古今題詠者多、詩勝境則境歸於詩、境勝詩則詩不入境、詩與境合、見詩即見境、境與詩合、見境即見詩、苟不然、則詩境兩失、日本旨禪者作天童十詠、句意不凡、書此以實其美^{xiv}」とあり、別源円旨が「天童十詠」を詠んだことが述べられている。しかし、ここで言われている「天童十詠」が『南遊集』に収録されている「天童十境韻」を指しているのかは定かではない。

『南遊集』に記載された「和雲外和尚天童十境韻」の10首は七言絶句の題詩で、「萬松關」「翠鎖亭」「宿鷺亭」「清關」「萬工池」「登閣」「玲瓏巖」「虎跑泉」「龍潭」「太白禪居」である。舒亶の「天童十題」とは、「宿鷺亭」「玲瓏巖」「虎跑泉」の3首が一致し、「龍潭」と「太白禪居」の2種が類似している。この十境詩の題のうち「天童十題」と一致していた、あるいは類似していた題以外に「萬松關」「翠鎖亭」「清關」「萬工池」は「山川攷」及び「建置攷」の章に記載されており、複数の作者がそれぞれの題に対して詠んだ詩が収録されているが、別源円旨の詩は収録されていない。

以下に別源円旨の「和雲外和尚天童十境韻」と舒亶の「天童十題」の題を表にして比較した。

別源円旨の「和雲外和尚天童十境韻」と舒亶の「天童十題」の題の比較

和雲外和尚天童十境韻（七言絶句）	天童十題
舒亶「天童十題」と共通する5首	
宿鷺亭	宿鷺亭
玲瓏巖	玲瓏巖
虎跑泉	虎跑泉
龍潭	龍池・神龍霧
太白禪居	太白峰
	太白庵
『天童寺志』「山川攷」「建	

置攷」の題詩と共通する 4 首	
萬松關	
翠鎖亭	
清關	
萬工池	
その他	
登閣	臨雲閣
	春樂軒
	響石
	佛石・佛蹟石

以上のことから、天童寺について詠まれた 10 首の題詩が存在することは確かであるが、10 題が必ずしも一致しているわけではない。別源円旨の「和雲外和尚十境韻」と舒宣の「天童十題」は同じ七言絶句で詠まれた 10 首の題詩であるが、完全に共通しているのは 10 題中の 3 題、「宿鷺亭」「玲瓏巖」「虎跑泉」だけであった。

次に舒宣及び別源円旨の 10 首の題詩と『扶桑五山記』に記載されている題との比較をする。『扶桑五山記』に記載されているのは「五鳳楼」「光明蔵」「九峯」「龍潭」「玲瓏巖」「雙沼」「宿鷺亭」「清關」「萬松關」「萬工池」「登閣」「妙高臺」「翠鎖亭」「門外二十里松徑」「虎跑泉」「太白禪居」の 16 題である。このうち、舒宣の 10 首と完全に共通するのは「宿鷺亭」「玲瓏巖」「虎跑泉」の 3 題で、類似しているのは「龍池（神龍霧）」「太白庵」の 2 題である。別源円旨の 10 首と完全に一致するのは「宿鷺亭」「玲瓏巖」「虎跑泉」「龍潭」「太白禪居」「萬松關」「翠鎖亭」「清關」「萬工池」「登閣」で 10 題全てが一致していることがわかった。反対に『扶桑五山記』だけに記載されているのは「五鳳楼」「光明蔵」「九峯」「雙沼」「妙高臺」「門外二十里松徑」の 6 題であった。以下にこれらを表にまとめた。

「和雲外和尚十境韻」及び「天童十題」と『扶桑五山記』記載の題の比較

『扶桑五山記』	別源円旨	舒宣
五鳳楼		

光明蔵		
九峯		
龍潭	龍潭	龍池・神龍霧
玲瓏巖	玲瓏巖	玲瓏巖
雙沼		
宿鷺亭	宿鷺亭	宿鷺亭
清關	清關	
萬松關	萬松關	
萬工池	萬工池	
登閣	登閣	
妙高臺		
翠鎖亭	翠鎖亭	
門外二十里松徑		
虎跑泉	虎跑泉	虎跑泉
太白禪居	太白禪居	太白庵
		太白峰
		響石
		佛石・佛蹟石
		臨雲閣
		春樂軒

以上に見られるように、『扶桑五山記』や別源円旨の 10 題と比較して、舒宣の 10 題はその半数が同一ではない。これは文献が書かれた国の違いを反映しているものと考えられる。

（４）浄慈寺

『勅建浄慈寺志』に収録されていた一定数のまとまった題詩は全て「西湖十景」詩であった。収録されていたのは巻首二の「御製詩拈額聯」の章と巻十四の「園亭一」の章である。また巻二十五には「藝文二 南屏詩一」、巻二十六には「藝文二 南屏詩二」という章があり、南屏を詠んだ詩が収められていた。南屏は『扶桑五山記』に記載されている 12 種の題の 1 番目に記載されている「南屏山或云南屏峯」を指すと考えられるが、これは浄慈寺の主山である。

「西湖十景」は断桥残雪、平湖秋月、曲院風荷、蘇堤春曉、三潭印月、花港觀魚、南屏晚鐘、雷峰夕照、柳浪聞鶯、双峰挿雲の 10 首だが、『浄慈寺志』に収録されて

いるのは「南屏晚鐘」と「雷峰夕照」の2種類だけであった。巻首二は「御製詩朴額聯」とあるように皇帝の詠んだ詩の扁額の対聯を収録した章である。「清聖祖仁皇帝御製詩朴額聯^v」とある通り、清代第四代皇帝の康熙帝(1654-1722)が詠んだと考えられる西湖十景詩の扁額が掛けられていた。康熙帝の扁額の題は「雷峯西照」と「南屏晚鐘」と記載されているが、「雷峯西照」は「雷峰夕照」と同種の題と考えられる。それぞれの題は詩を伴っておらず、扁額が掛けられていた場所が記載されていた。「雷峯西照」は「恭鐫石刻在雷峯之巔有亭^{vi}」とあるので、雷峰の頂に有る亭に掛けられていた。また「南屏晚鐘」は「恭鐫石刻在寺門對面有亭^{vii}」とあり、山門に面して建てられていた亭に掛けられていたことがわかる。収録されていた詩は「南屏晚鐘」「雷峰夕照」がそれぞれ7首で、最初の1首ずつが作者の判る和韻詩を伴っていた。残る5首ずつはいずれも疊舊作韻と記載されており、5首全てが最初の詩の疊韻詩であった。また巻十四の「園亭一」には「南屏晚鐘」「雷峰夕照」共に異なる作者の詩が27首ずつ収録されていた。作者は「南屏晚鐘」と「雷峰夕照」で作者が共通している詩は27首中23首であった。

『浄慈寺志』には西湖十景中の「南屏晚鐘」と「雷峰夕照」だけが収録されていたが、これはいずれも浄慈寺周辺の景観を詠んでいるという理由からと考えられる。その一方で、寺院に対して選定された「境致」や「十境」詩、或いは「十景」「十詠」などの記載はなかった。

(5) 阿育王寺

『明州阿育王山志』の巻十上下は「玉几社詠」と題された章で、阿育王寺に対して詠まれた詩が収録されている。この中には、ひとまとまりの題詩がいくつか含まれていた。

巻十の上には、「阿育王四景」と題して、雪巖祖欽(13世紀)の詠んだ「舍利塔」「望海亭」「無畏堂」「淵靈廟」の七言絶句詩。「阿育王八景」と題して、それぞれ作者の異なる8首の七言律詩の題詩;倪光(明代)の「山横玉几」、杜英の「香篆燒雲」、鄒閭の「燈燃兩塔」、史鏞の「井湧金沙」、方震の「鐘度重關」、王政の「螢照松堂」、倪鑑の「鹿鳴芝洞」、蔡欽の「茶鐺煮月」。そして樂長卿の「育王山十詠」と題して「舍利塔」「玉

几峰」「金沙井」「仙書岩」「佛石」「七沸潭」「大權洞」「承恩閣」「涌現巖」「妙喜泉」の10首の七言絶句詩である。

『明州阿育王山續志』巻十一には、宋代の官僚楊覃(958-1011)の「和育王十二題」という題詩が収録されていた。五言絶句で詠まれた「金沙池」「佛跡峯」「七沸石」「袈裟衣」「名月臺」「石屏峯」「靈鰻井」「供奉泉」「育王塔」「八角殿」「晉年札」「重臺蓮」の12題である。また巻十二には、阿育王寺第八十代住持の釋自學(明代)が詠んだ「次十境韻」という七言絶句の次韻詩が収録されている。題は「舍利塔」「涌現岩」「七沸潭」「大權洞」「佛跡岩」「仙書岩」「妙喜泉」「宸奎閣」「金沙井」「玉几峯」であった。そして同じく阿育王寺第八十四代住持、清源本(明代)の「次十景韻」が収録されているが、これは前述の釋自學による「次十境韻」詩と共通の韻を踏んでいることがわかった。

巻十五には、清代の阿育王寺の禅僧である釋晩荃の五言律詩が10首収録されている。題は「涌現岩」「玉几峰」「金沙井」「放光松」「赤堇峰」「佛蹟亭」「鬼谷祠」「望海亭」「妙喜泉」「袈裟石」であった。この釋晩荃の10首は、「十境」「十景」といった、ひとまとまりの題詩として収録されてはいなかった。しかし10題中「涌現岩」「玉几峰」「金沙井」「妙喜泉」の4題は前述の釋自學の「次十境韻」と共通しており、「望海亭」は雪巖祖欽の「阿育王四景」にも入っている。

『阿育王山志』及び『阿育王山續志』には「阿育王四景」「阿育王八景」「育王山十詠」「和育王十二題」「次十境韻」「次十景韻」そして釋晩荃の10題の合計7種類のもとまった題詩が収録されていた。これらの題詩を種類ごとにまとめたものが以下の表である。

『阿育王山志』『阿育王山續志』収録の題詩の比較

阿育王四景(七言絶句)	阿育王八景(七言律詩)	育王山十詠(七言絶句)	和育王十二題(五言絶句)	次十境韻(七言絶句)	次十景韻(七言絶句)	釋晩荃の十題(五言律詩)
舍利	燈燃	舍利	名月	舍利	舍利	望海

塔	兩塔	塔	臺	塔	塔	亭
望海亭	井湧 金沙	金沙 井	金沙 池	金沙 井	金沙 井	金沙 井
無畏堂	山横 玉几	玉几 峰	八角 殿	玉几 峯	玉几 峯	玉几 峰
淵靈廟	香篆 燒雲	七沸 潭	七沸 石	七沸 潭	七沸 潭	放光 松
	鐘度 重關	佛石	佛跡 峯	佛跡 岩	佛跡 岩	佛蹟 亭
	螢照 松堂	仙書 岩	石屏 峯	仙書 岩	仙書 岩	赤堇 峰
	鹿鳴 芝洞	大權 洞	靈鰻 井	大權 洞	大權 洞	鬼谷 祠
	茶鐺 煮月	涌現 巖	供奉 泉	涌現 岩	涌現 岩	涌現 岩
		妙喜 泉	育王 塔	妙喜 泉	妙喜 泉	妙喜 泉
		承恩 閣	袈裟 衣	宸奎 閣	宸奎 閣	袈裟 石
			晉年 札			
			重臺 蓮			

同じ題で色分けすると「育王山十詠」と「次十境韻」「次十景韻」は9題が同じで、残る1題も「閣」であることがわかる。詩の形態も同じ七言絶句であった。確かめると「育王山十詠」詩と「次十境韻」「次十景韻」詩が共通の韻を踏んで詠まれていることがわかったので「次十境韻」と「次十景韻」は「育王山十詠」詩の次韻詩であると考えることができる。また「育王山十詠」の「承恩閣」が他の2題では「宸奎閣」になっているが詩自体は共通の韻を踏んでいた。宸奎閣は南北に延びる阿育王寺伽藍の最も北で、中軸の西側に位置しており、蘭溪道隆が阿育王寺に住持した時に、地元の人々によって寄進されたものである。北宋第四代皇帝の仁宗（1010 - 1063）が親書した頌詩の宸翰を奉じたことから宸奎閣と名づけられた。「承恩閣」については、宸奎閣の南に位置する方丈殿の一室が承恩堂と呼ばれている^{xviii}ので、方

丈に付随した重層建築物であったと考えられる。これらのことから、題詩の「承恩閣」と「宸奎閣」は別の対象物について詠まれた詩であるが、「宸奎閣」は「承恩閣」と同じ韻を踏んでいる和韻詩であると結論づけた。韻は4文字中の2文字か3文字取っている場合が多いが「次十境韻」詩と「次十景韻」詩の韻の数を比較すると、すべての詩で同数か、あるいは「次十景韻」詩で「次十境韻」に対する韻がさらに詠み込まれているかのいずれかであった。たとえば「舍利塔」では「次十境韻」詩と「次十景韻」詩の「育王山十詠」に対する韻は結句の1文字だけであるが、「次十景韻」詩の「次十境韻」詩に対する韻は承句と結句の2文字あった。また「仙書岩」では「育王山十詠」詩に対する韻は起句、承句、結句の3文字であったが、「次十景韻」詩の「次十境韻」詩に対する韻はさらに転句も含まれて四句全てで韻を踏んでいた。これらの例から、「育王山十詠」詩の次韻詩は「次十境韻」だけで、「次十景韻」は「次十境韻」詩の次韻詩として詠まれたものであると考えることができる。

以上のことから「育王山十詠」と「次十境韻」「次十景韻」は10首でまとまった題詩とそれに続く次韻詩であることがわかった。次に他の題詩について考察する。まず「阿育王八景」は、先述の3種類の題詩同様に七言絶句で詠まれている。しかし先述の3種類の題詩と共通しているのは4題中「舍利塔」1題だけで、その詩も韻の共通性は見られない。「望海亭」は、釋旹荃の10題にも含まれている題だが、五言律詩で詠まれている釋旹荃の詩との共通性はないと言える。残る2題は、他のいずれの題詩にも含まれていなかった。

「阿育王八景」は七言律詩で、題が4文字で情景描写が表現されていることは瀟湘八景詩の伝統的技法と共通する。また七言律詩で詠まれていることも、多くの瀟湘八景詩の形態と共通する。これは他の題詩には見られない「阿育王八景」詩の特徴で、瀟湘八景詩に倣った名所題詩として詠まれたものであると考えられる。

「和育王十二題」は、もともと12題の詩に和した題詩であると推測されるが、もともとなった題詩自体は収録されていなかった。題になっている景物のいくつかは他の題詩でも詠まれているが、いずれも他の題詩の題銘とわずかに違う。例えば他の題詩では全て「金沙井」となっているものが「和育王十二題」では「金沙池」となっ

ており、他で「七佛澤」となっているものは「七佛石」となっている。また、題で他の題詩と共通するのは4題だけで、残る8題は「和育王十二題」だけに見られる景物である。題が共通している4首についても、詩が五言絶句で詠まれているので、他の題詩との共通性はない。

最後に釋琬荃の10題についてであるが、これは釋琬荃が詠んだ10首の題詩をひとまとめにしたものである。題が他の題詩と共通しているのは7首と多いが、その中で「育王山十詠」「次十境韻」「次十景韻」と共通するのは「金沙井」「玉几峰」「佛石(亭)」「涌現岩」「妙喜泉」の5題で、残る「望海亭」と「袈裟(石)」の2題は「阿育王四景」と「和育王十二題」とそれぞれ1題ずつ共通していた。ただし釋琬荃の10題は五言律詩で詠まれているので、題が共通していても他の題詩との共通性は見られない。

『明州阿育王山志』『明州阿育王山續志』には1種類の「十境」詩が収録されていた。この題詩は「次十境韻」とあることから次韻詩であることがわかった。しかしこの題詩のもととなったと考えられる題詩は「十境」ではなく「育王山十詠」としてまとめられていた。また「次十境韻」詩のさらに次韻詩であると考えられる題詩も収録されていたが、これは「次十景韻」として記載されていた。次韻詩を作成する場合でも十詠と十境そして十景は同意語として扱われていると考えられ、もとの題詩に倣う必要はないということが言える。このことは禅宗寺院において「十境」や「境致」が、禅宗固有の特別な概念として捉えられていたわけではなく、「詠」や「景」と同等に用いられていたことを示唆するものである。

次に『明州阿育王山志』『明州阿育王山續志』に収録されていた題詩を『扶桑五山記』に記載されている題と比較した。『扶桑五山記』に記載されているのは「玉几峯」「玉几亭」「無畏堂」「妙喜泉」「鄮峰」「舍利道場」「靈鰻池」の7題である。この中で『明州阿育王山志』『明州阿育王山續志』の題詩と共通する題を取り上げると、完全に一致するのは「玉几峯」「無畏堂」「妙喜泉」の3題であった。また「靈鰻池」は類似する「靈鰻井」があった。残る「玉几亭」「鄮峰」「舍利道場」はいずれの題詩にも含まれていなかった。しかしいずれの題詩も『扶桑五山記』の4題の中の1題あるいは2題を含むに止まっていた。「玉几峯」と「妙喜泉」は「育

王山十詠」及び2種類の次韻詩に、「無畏堂」は「阿育王四景」にそれぞれ含まれており、「靈鰻池」は「和育王十二題」の「靈鰻井」と共通している。以下は、これを表にまとめたものである。

『扶桑五山記』記載の題と共通する『阿育王山志』『阿育王山續志』の題詩分類

扶桑五山記	阿育王山志・續志の題詩
玉几峯	育王山十詠・次韻詩2種類
妙喜泉	育王山十詠・次韻詩2種類
無畏堂	阿育王四景
靈鰻池	和育王十二題（「靈鰻井」）

以上のことから、『扶桑五山記』に記載されている題は必ずしも中国仏教寺院志に編纂された題詩と共通しているわけではないことがわかる。阿育王寺志には南宋五山寺院の寺志の中で唯一「十境」が収録されていたが『扶桑五山記』に記載されていた題の中で、この十境詩と共通する題は「玉几峯」と「妙喜泉」の2題だけであった。

(6) 小結

ここまで南宋五山の各寺院の寺志に収録されていた題詩について分析したが、「十境」詩が収録されていたのは阿育王寺志に1種類だけであった。まとまった題詩の収録は複数あったが、必ずしも10首でまとめられているわけではなく、四題、八題、十二題が存在した。まとめられた題詩に使用されているのは「境」の他に「景」「詠」「題」などで、最も多く収録されていたのは「景」であった。これは、天童寺志に「太白山十景詩」、浄慈寺志には「西湖十景」のうちの2題、そして阿育王寺志には「次十景韻」「阿育王四景」「阿育王八景」の3種類が収録されていたので、五山寺院志全てを合計すると5種類であった。「詠」「題」はそれぞれ1種類ずつあり、いずれも阿育王寺志に収録されていた「育王山十詠」と「和育王十二題」である。五山寺院の寺志には、まとまった形で収録されている題詩が全くない場合も多かった。萬寿寺には全く収録されておらず、詩はそれぞれ単独で記載されていた。靈隠寺には「靈隠寺志十首」という記載があったが、この10首がもとは、「境」「景」「詠」

「題」などでまとまった題詩であったかは定かではない。浄慈寺には「西湖十景」の記載があったが、収録されていたのは「西湖十景」詩中の2題のみであった。そもそも「西湖十景」は、純粋に浄慈寺自体に対して詠まれた詩であるとは言い難い。結論として、まとまった題詩が収録されているのは、天童寺志の「太白山十景詩」と、阿育王寺志の「育王山十詠」「次十境韻」「次十景韻」「阿育王四景」「和育王十二題」「阿育王八景」で、五山寺院中の2寺だけであった。そしてこのうちの「太白山十景詩」と「阿育王八景」は、浄慈寺の「西湖十景」2首と同様に「瀟湘八景」詩の形式を取っていて、この他の題詩とは種類が異なる題詩群であるということがわかった。

また、10首の詩をひとまとまりにして収録している例だけを取り上げてみると、霊隠寺の「霊隠寺志十首」（霊隠寺志に収録されているのは7首）、天童寺の舒亶の詩10首（『乾道四明図経』に収録されている「天童十題」と同一のもの）と「太白山十景詩」（「瀟湘八景詩」と同種のもの）、阿育王寺の「育王山十詠」「次十境韻」「次十景韻」の6種類であった。この中で、「太白山十景詩」は「瀟湘八景」詩や浄慈寺志に収録されていた「西湖十景」と同種のもののなので、その他の5種類とは形式が異なる。霊隠寺と天童寺のものは、10首ひとまとまりになった題詩ではないという点で共通している。それに対して阿育王寺の「育王山十詠」「次十境韻」「次十景韻」は、日本の禅宗寺院で数多く詠まれた「十境詩」に最も近い型式を取っている。特に「次十境韻」は「育王山十詠」の次韻詩ではあるが、南宋五山寺院の寺志の中に収録されていた唯一の「十境詩」である。ただし『扶桑五山記』に記載されている題と共通の題の詩は2首だけであった。

3. 中国禅宗寺院で詠まれた題詩が冠する「詠」、「景」、「境」それぞれの特徴や違い

（1）「詠」、「景」、「境」それぞれが使用される傾向について

これまで中国禅宗寺院の中の南宋五山寺院について、『中國佛寺志彙刊』のそれぞれの文献から、詠まれた題詩の分類をおこなってきた。そこで本章では、南宋五山寺院以外の仏教寺院でも、同じような題詩が詠まれてい

たのかを確かめるため『中國佛寺志彙刊』に入っている他の仏教寺院志を調べて、記載されている題詩の種類とその数の統計を取った。その結果、五山寺院以外の仏教寺院でも多くのまとまった題詩が詠まれていることがわかった。最も多くみられるのは「景」で11種類あった。次に「詠」が3種類で、残る1種は名称を伴わずにひとまとまりの題詩として収録されていた。しかし、「境致」や「十境」と銘打たれた題詩は確認できなかった。11種類の「景」と3種類の「詠」の特徴を挙げると、「詠」の題詩は全て10首でひとまとまりであるのに対して、「景」は10首ひとまとまりが11種類中8種類で、その他6首、8首、14首でまとまっているものが1種類ずつあった。

上記の結果に五山寺院の題詩をふくめた場合でも「景」の題詩が最も多く、17種類であった。その中で「十景」は12種類で、それ以外は「四景」「六景」「十四景」がそれぞれ1種類ずつ、「八景」が2種類であった。また、「詠」の題詩は5種類で、その全てが「十詠」であった。「景」と「詠」以外の例としては、『阿育王寺志』に収録されていた「和育王十二題」と「次十境韻」が挙げられる。このことから『中國佛寺志彙刊』に収録されている、まとまった題詩の多くは10首でひとまとまりとされているということが明らかとなった。

まず「詠」は必ず10首でひとまとまりとなっていた。収録数では「十景」が一番多いが「景」には10首以外でひとまとまりとなっている例もあった。ただ、10首以外の場合も「四景」「六景」「八景」「十四景」と、必ず偶数でまとめられていた。また次韻詩が収録されていたが、もとの題詩が「十詠」であるのに対して韻詩は「十境」としてまとめられており、さらに「十境」詩の韻詩が「十景」としてまとめられていた。これは「十詠」、「十景」、「十境」が同一の意味で用いられていたこと、さらにそれらを用いる場合には、それぞれに明確な区別がなされていなかったことを示すものと考えられる。

ここまで、各寺院志に記載された題詩を主にひとまとまりになった題詩の数によって整理してきた。次に、この結果を踏まえた上で、それぞれの題詩の特徴を分類し、「詠」「景」「境」という表題の違いが、詩に詠まれる対象の違いや特徴に関係しているのかを検討した。初めに、これまでに題詩を挙げた全ての寺院について、それぞれの『寺志』に収録されていた題詩と共に記述する。

寺院ごとに整理し、まとまった題詩が名称を冠して収録されていた場合はその名称、同一作者によるまとまった題詩の場合はその作者名、それ以外の場合は本文で使われている名称を用いて記載した。最初に南宋五山寺院の5寺について記載し、次に、それ以外の仏教寺院で題詩の記載が確認できた寺院を、題詩と共に全て挙げた。

(i) 萬寿寺

萬寿寺には、1種類が確認された。題詩に対する名称はなく、作者の記載もなかった。『寺志』に記載されていた名称は「偈詠」で、「喝石（巖）」「凌霄（閣・庵）」「含暉亭」「盤陀石」「靈雞塚」「妙喜庵」の6題であった。

(ii) 靈隱寺

靈隱寺には、5種類確認できた。2つは作者名の記載があり、題詩に対する名称がなかった。梅詢の題詩は7首で、「本寺（靈隱寺）」「冷泉亭」「飛來峰」「曲水亭」「龍泓洞」「蓮華石」「猿呼洞」である。郭祥正の題詩は12首で、「北高峰塔」「石門澗」「靈隱浦」「合澗橋」「猿呼洞」「葛塢」「韜光菴」「西菴」「臥犀泉」「青林洞」「白沙泉」「翻經臺」である。

題詩に対する名称がなく、「詩詠」として記載されていたものが6首あり、題は「飛來峰」「冷泉亭」「北高峰」「猿呼洞」「九里松」「合澗橋」である。

題詩に対して名称が付いていたものが、2種類あった。1つは、「靈隱十詠」で、題は「靈隱寺」「冷泉亭」「蓮花峰」「飛來峰」「鍊丹井」「猿呼洞」「水臺盤」「翻經臺」「高峰塔」「龍泓洞」である。もう1つは「靈隱十景」で、題は「蓮花峰」「龍泓洞」「葛洪井」「合澗橋」「連巖棧」「飯猿臺」「夢謝亭」「理公巖」「題名塔」「猿呼洞」である。

(iii) 天童寺

天童寺には作者の名前で収録された題詩が2種類あった。舒亶の題詩は、「太白峰」「玲瓏巖」「響石」「佛蹟石」「神龍霧」「虎跑泉」「臨雲閣」「春樂軒」「宿鷺亭」「太白庵」の10題である。釋元乗は、「深徑廻松」「青關噴雪」「雙池印景」「西磻分鐘」「玲瓏天鑿」「太白生雲」「東谷秋紅」「南山晚翠」「平臺鋪月」「鳳岡

修竹」の10題で、「瀟湘八景」詩の形式の題であることがわかる。

(iv) 淨慈寺

淨慈寺については、『寺志』に西湖十景との記載があり、「南屏晚鐘」「雷峰夕照」の2題が収録されていた。

(v) 阿育王寺

阿育王寺には6種類の題詩が収録されていた。そのうちの5種類には題詩に名称が付けられていた。残る1種は作者名での収録であった。

「阿育王四景」は「舍利塔」「望海亭」「無畏堂」「淵靈廟」の4題が記載されている。「阿育王八景」は、「山横玉几」「香篆燒雲」「燈燃兩塔」「井湧金沙」「鐘度重關」「螢照松堂」「鹿鳴芝洞」「茶鐺煮月」で、「瀟湘八景」詩の形式である。「育王山十詠」は、「舍利塔」「玉几峰」「金沙井」「仙書岩」「佛石」「七沸潭」「大權洞」「承恩閣」「涌現巖」「妙喜泉」である。「和育王十二題」は、「金沙池」「佛跡峯」「七沸石」「袈裟衣」「名月臺」「石屏峯」「靈鰻井」「供奉泉」「育王塔」「八角殿」「晉年札」「重臺蓮」が記載されている。そして「次十境韻」と「次十景韻」は同じ10題に対して詠まれた詩で、題は「舍利塔」「涌現岩」「七沸潭」「大權洞」「佛跡岩」「仙書岩」「妙喜泉」「宸奎閣」「金沙井」「玉几峯」である。

作者の名前で収録されていたのは、釋曉荃の10首で、「涌現岩」「玉几峰」「金沙井」「放光松」「赤菴峰」「佛蹟亭」「鬼谷祠」「望海亭」「妙喜泉」「袈裟石」である。

(vi) 聖水寺

聖水寺には、「山中十詠」という名称の題詩が収録されており、その題は「聖水寒巖」「塔基松樂」「振衣亭」「超然亭」「一滴泉」「三台石」「西山晴雪」「東嶺翠濤」「古堞秋雲」「長廊夜月」である。これは「瀟湘八景」詩形式の題と景物の名称の題が10題の中に混在しており、統一されていない。

(vii) 峨眉山

峨眉山は「峨眉十景」が詠まれており、題は「瀟湘八

景」形式の「金頂祥光」「靈巖疊翠」「聖寺晚鐘」「象池夜月」「白水秋風」「洪椿曉雨」「雙橋清音」「九老仙府」「大坪霽雪」「羅峯晴雲」である。

(iix) 戒壇寺

戒壇寺の「寶極觀十景」は「弧雲訪道」「赤脚談玄」「蒼松雪鶴」「玉沼金鱗」「祖庭秋月」「仙閣朝霞」「觀橋春水」「環林夕照」「石壇丹桂」「玄圃緋桃」の10題である。

(ix) 雲棲寺

雲棲寺の「雲棲六景」は「廻耀峯」「寶刀ロウ（山編に龍）」「壁觀峯」「青龍泉」「聖義泉」「金液泉」の6題である。

(x) 華嚴教寺

華嚴教寺の題詩は名称が付いておらず、景物として、「玉岑聳峙」「慧澗環流」「箕泉瀉珠」「蛟窗橫鐵」「石窩怪石」「雕礎神工」「輪藏凌雲」「普門却暑」「瑞光古像」「徑閣幽觀」の10題が収録されている。

(xi) 棲霞寺

棲霞寺は、題詩に名称が付いたものが2種類あった。先ず「遊攝山十二首詩韻」には、「綵虹明鏡」「幽居」「般若臺」「桃花澗」「紫峰閣」「玉冠峯」「千佛巖」「九株松」「疊浪崖」「萬松臺」「白鹿泉」「最高峯」の12題が記載されている。そして「題棲霞十景」には、「棲霞山」「玲峯池」「紫峯閣」「萬松山房」「天開巖」「幽居菴」「疊浪崖」「珍珠泉」「彩虹明鏡」「德雲菴」の10題が記載されている。

(xii) 廣濟寺

廣濟寺は「十景詩」として、「梵閣春雲」「徑臺夜月」「中庭放鶴」「別室馴猿」「花開方丈」「香裊深窓」「院樹秋陰」「海棠晚色」「大椿團蓋」「仙棗垂櫻」の10題が記載されている。

(xiii) 慶雲寺

慶雲寺は題詩の名称が付けられているものが4種類収録されていた。「題鼎湖十景」は、「湖山鼎峙」

「峽水朝宗」「憩菴環翠」「小歇羣峯」「方池月印」「曲徑雲封」「龍澤飛瀑」「鳳嶺疎鐘」「菩提花雨」「塔院香風」の10題である。「鼎湖十景」は、「湖山鼎峙」「峽水朝宗」「憩菴環翠」「小歇羣峯」「方池月印」「曲徑雲封」「龍澤飛瀑」「鳳嶺疎鐘」「菩提花雨」「塔院香風」の10題である。「天湖十四景」は、「折路勝空」「曲泉尋海」「虎谿煙鎖」「鳳巔雲過」「石塢凌霄」「袈裟布地」「碧潭龍舞」「瀑澗猿啼」「鷺山暮雨」「壁嶂晴雲」「石徑行僧」「松陰踞客」「肩臺澹月」「龍井疎星」の14題である。「慶雲十詠」は、「湖山鼎峙」「峽水朝宗」「憩菴環翠」「小歇羣峰」「方池月印」「曲徑雲封」「龍澤飛瀑」「鳳嶺疎鐘」「菩提花雨」「塔院香風」の10題である。

(xiv) 増城海門寺

増城海門寺は同じ10題に対して3種類の詩が収録されていた。1つは題詩に名称が付けられておらず「十景詩」として収録されていた。残る2つは名称がついており、それぞれ「華峯十詠」と「華峯十景詩」であった。その10題は、「斷塵石僧歸」「整衣臺晚眺」「觀瀑臺雨霽」「一葉軒乘涼」「聽琴石流泉」「蝴蝶洞深花」「阿耨池月印」「臥雲洞枕石」「梅花亭賞雪」「太古居談經」である。

また、「羊城八景詩」と題された詩の中で2題だけが収録されていた。題は「蒲澗濂泉」「景泰僧歸」である。

(2) 「詠」、「景」使用時に傾向について

本節では、前節でまとめた各寺院の題詩を「詠」「景」などの名称ごとに分け、さらにその中で題詩の種類ごとに区分けした。こうすることにより、「詠」や「景」がどのような種類の詩詠の時に使用されるかという傾向が明らかになると考えた。

題詩の種類の違いは大きく2種類あると考える。一つは『扶桑五山記』の日本の禅宗寺院の章に記載されている「境致」と同様に景物の名称をそのまま題としているもの、もう一つは「瀟湘八景」詩の題と同様に景観の情景を描写しているものである。この、景物の名称をそのまま題にしている詩と瀟湘八景のような所謂「八景」詩の違いは非常に明確である。本稿では便宜上「境致」系と「瀟湘八景」系という語を使用して区別をおこなった。

ここで言う「境致」系の題詩には「境」だけではなく「景」や「詠」を冠しているものも含まれているが、いずれも題に選ばれている場所が対象となる景物の名称そのものであるという点で共通するものを分類した。それに対して「瀟湘八景」系については、これも「景」とは限らず「詠」を冠した例も多く在る上に、題詩の数も8首であるとは限らない。それでも「瀟湘八景」系に分類する根拠として、題が4文字で表されている例が殆どであること、そしてその題は景物の名称ではなく、景物を含む景観を描写しているものであるということが挙げられる。また次章では詩の内容についての分析をおこなっているが、詠まれている詩の内容についても「境致」系の題詩と「瀟湘八景」系の題詩では違いが見られる。即ち「境致」系の詩では、題に選ばれている景物に対する観念的な説明を試みる内容であるのに対して、「瀟湘八景」系の題詩では、景観に対する情景描写が中心で、「境致」系の詩と比較してより文学的であると言える。

(i) 詠

「境致」系には以下の3種類が確認できた。

- ① 靈隠十詠「靈隠寺」「冷泉亭」「蓮花峰」「飛來峰」「鍊丹井」「猿呼洞」「水臺盤」「翻經臺」「高峰塔」「龍泓洞」
- ② 靈隠十景「蓮花峰」「龍泓洞」「葛洪井」「合澗橋」「連巖棧」「飯猿臺」「夢謝亭」「理公巖」「題名塔」「猿呼洞」
- ③ 育王山十詠「舍利塔」「玉几峰」「金沙井」「仙書岩」「佛石」「七沸潭」「大權洞」「承恩閣」「涌現巖」「妙喜泉」

「瀟湘八景」系には以下の2種類が確認できた。

- ① 慶雲十詠「湖山鼎峙」「峽水朝宗」「憩菴環翠」「小歇羣峰」「方池月印」「曲徑雲封」「龍澤飛瀑」「鳳嶺疎鐘」「菩提花雨」「塔院香風」
- ② 山中十詠「聖水寒巖」「塔基松樂」「振衣亭」「超然亭」「一滴泉」「三台石」「西山晴雪」「東嶺翠濤」「古堞秋雲」「長廊夜月」

山中十詠は「境致」系と「瀟湘八景」系の題が混在していることがわかる。

(ii) 景

a) 十首で一まとまりになっているものを、さらに「瀟湘八景」系と「境致」系の2種類に分類した。

「瀟湘八景」系には以下の7種類が確認できた。

- ① 西湖十景「南屏晚鐘」「雷峰夕照」
- ② 峨眉十景「金頂祥光」「靈巖疊翠」「聖寺晚鐘」「象池夜月」「白水秋風」「洪椿曉雨」「雙橋清音」「九老仙府」「大坪霽雪」「羅峯晴雲」
- ③ 寶極觀十景「弧雲訪道」「赤脚談玄」「蒼松雪鶴」「玉沼金鱗」「祖庭秋月」「仙閣朝霞」「觀橋春水」「環林夕照」「石壇丹桂」「玄圃緋桃」
- ④ 十景詩「梵閣春雲」「徑臺夜月」「中庭放鶴」「別室馴猿」「花開方丈」「香裊深窓」「院樹秋陰」「海棠晚色」「大椿團蓋」「仙棗垂瓊」
- ⑤ 題鼎湖十景「湖山鼎峙」「峽水朝宗」「憩菴環翠」「小歇羣峰」「方池月印」「曲徑雲封」「龍澤飛瀑」「鳳嶺疎鐘」「菩提花雨」「塔院香風」
- ⑥ 鼎湖十景「湖山鼎峙」「峽水朝宗」「憩菴環翠」「小歇羣峰」「方池月印」「曲徑雲封」「龍澤飛瀑」「鳳嶺疎鐘」「菩提花雨」「塔院香風」
- ⑦ 十景詩・華峯十詠・華峯十景詩「斷塵石僧歸」「整衣臺晚眺」「觀瀑臺雨霽」「一葉軒乘涼」「聽琴石流泉」「蝴蝶洞深花」「阿耨池月印」「臥雲洞枕石」「梅花亭賞雪」「太古居談經」この題詩は漢字五文字で構成されているが、上述の十景の題詩と同様に情景を描写する題であることから「瀟湘八景」系に含めてよいと考える。

「境致」系には以下の2種類が確認できた。

- ① 題棲霞十景「棲霞山」「玲峯池」「紫峯閣」「萬松山房」「天開巖」「幽居菴」「疊浪崖」「珍珠泉」「彩虹明鏡」「德雲菴」
- ② 次十境韻・次十景韻「舍利塔」「涌現岩」「七沸潭」「大權洞」「佛跡岩」「仙書岩」「妙喜泉」「宸奎閣」「金沙井」「玉几峯」

b) 10首で一まとまりにはなっていない題詩を、さらに「瀟湘八景」系と「境致」系に分類した。

「瀟湘八景」系には以下の3種類が確認できた。

- ① 阿育王八景「山橫玉几」「香篆燒雲」「燈燃兩塔」「井湧金沙」「鐘度重關」「螢照松堂」「鹿鳴芝洞」「茶鐺

煮月」

②羊城八景詩（2題）「蒲澗濂泉」「景泰僧歸」

③天湖十四景「折路勝空」「曲泉尋海」「虎谿煙鎖」「鳳巔雲過」「石塢凌霄」「袈裟布地」「碧潭龍舞」「瀑澗猿啼」「鷺山暮雨」「壁嶂晡雲」「石徑行僧」「松陰踞客」「肩臺澹月」「龍井疎星」

「境致」系には以下の2種類が確認できた。

①阿育王四景「舍利塔」「望海亭」「無畏堂」「淵靈廟」

②雲棲六景「廻耀峯」「寶刀口（山編に龍）」「壁觀峯」「青龍泉」「聖義泉」「金液泉」

c) その他の形式で、さらに瀟湘八景系と「境致」系「に分類した。

「瀟湘八景」系には以下の2種類が確認できた。

①釋元乗（10首）「深徑廻松」「青關噴雪」「雙池印景」「西礪分鐘」「玲瓏天鑿」「太白生雲」「東谷秋紅」「南山晚翠」「平臺鋪月」「鳳岡修竹」

②景物（10首）「玉岑聳峙」「慧澗環流」「箕泉瀉珠」「蛟窗橫鐵」「石窩怪石」「雕礎神工」「輪藏凌雲」「普門却暑」「瑞光古像」「徑閣幽觀」

「境致」系には以下の8種類が確認できた。

①舒宣（10首）「太白峰」「玲瓏巖」「響石」「佛蹟石」「神龍霧」「虎跑泉」「臨雲閣」「春樂軒」「宿鷺亭」「太白庵」

②釋峴荃（10首）「涌現岩」「玉几峰」「金沙井」「放光松」「赤菴峰」「佛蹟亭」「鬼谷祠」「望海亭」「妙喜泉」「袈裟石」

③偈詠（6首）「喝石（巖）」「凌霄（閣・庵）」「含暉亭」「盤陀石」「靈雞塚」「妙喜庵」

④詩詠（6首）「飛來峰」「冷泉亭」「北高峰」「猿呼洞」「九里松」「合澗橋」

⑤梅詢（10首中7首収録）「本寺（靈隱寺）」「冷泉亭」「飛來峰」「曲水亭」「龍泓洞」「蓮華石」「猿呼洞」

⑥郭祥正（12首）「北高峰塔」「石門澗」「靈隱浦」「合澗橋」「猿呼洞」「葛塢」「韜光菴」「西菴」「臥犀泉」「青林洞」「白沙泉」「翻經臺」

⑦和育王十二題「金沙池」「佛跡峯」「七沸石」「袈裟衣」「名月臺」「石屏峯」「靈鰻井」「供奉泉」「育王

塔」「八角殿」「晉年札」「重臺蓮」

⑧遊攝山十二首詩韻「綵虹明鏡」「幽居」「般若臺」「桃花澗」「紫峰閣」「玉冠峯」「千佛巖」「九株松」「疊浪崖」「萬松臺」「白鹿泉」「最高峯」

(iii) 「詠」と「景」が使用される傾向についての分析

これまで「詠」と「景」を冠した名称を持つ題詩を、「瀟湘八景」系と「境致」系の2種類に分類した。その中で2種類の題詩がそれぞれ幾つあるかを以下にまとめた。

a) 詠

「詠」を冠する題詩は全て10首で一まとまりになっていた。その中で「境致」系が3種類、「瀟湘八景」系が1種類であった。また「境致」系と「瀟湘八景」系が混在していたものが1種類あった。その合計は5種類である。

b) 景

「景」冠する題詩は10首一まとまりのものと、そうでないものがあつた。10首一まとまりだったもののうち、「瀟湘八景」系は9種類、「境致」系は3種類であった。その合計は12種類であった。また、10首一まとまりではないものについては、「瀟湘八景」系が3種類（そのうち、八景が2種類、十四景が1種類）で、「境致」系が2種類（四景、六景が1種類ずつ）であった。その合計は5種類である。

c) その他

上述したa、bのいずれにも当てはまらないものについては、「境致」系が8種類で、10首が3種類、6首が2種類、12首が3種類であった。ただし、10首3種類中の1種類は7首のみの収録であった。「瀟湘八景」系は2種類で、いずれも10首一まとまりであった。その合計は10種類である。

以上のことについて、まず「詠」でまとめられた題詩は全て10首で一揃い（「十詠」）となっていることが注目される。題詩の名称はどれも、「十詠」の頭に場所の名前を冠している。そして題の種類については、景物の

名称をそのまま使用している「境致」系の方が多く、それはいずれも五山寺院で詠まれたものであった。

それに対して「景」の題詩では、10首で一まとまりになっているもの（「十景」）もそれ以外の数で一まとまりになっているものも、景観の情景を描写する「瀟湘八景」系の数が多かった。10首以外の数で一まとまりのものでは、「八景」が2種類あったが、これはそのまま「瀟湘八景」詩を連想する題詩である。特に「阿育王八景」については、八景詩が8首全て収録されており、先の『阿育王寺志』のところで述べたが、「瀟湘八景」詩と類似した特徴を持っている。それでも双方の題を比較してみると、「阿育王八景」の方は「瀟湘八景」の題ほど抒情的ではないように思われる。比較するため、以下に双方の題を列記した。

阿育王八景：「山横玉几」「香篆燒雲」「燈燃兩塔」「井湧金沙」「鐘度重關」「螢照松堂」「鹿鳴芝洞」「茶鐺煮月」

瀟湘八景：「瀟湘夜雨」「洞底秋月」「煙寺晚鐘」「遠浦歸帆」「山市晴嵐」「漁村夕照」「江天暮雪」「平沙落雁」。

このように、「阿育王八景」の題は、情景ではなくその時の状況を描写したものが多くことがわかる。いずれにしても「景」の題詩の特徴は「詠」とは対照的に「瀟湘八景」から派生した題詩が中心になっていると考えられる。

最後に「詠」や「景」という名称が冠されていない題詩についてであるが、これは「境致」系の題のものが8種類で「瀟湘八景」系の題のものが2種類と、「境致」系のものの方が多かった。

全体を見ると、「境致」系が16種類、「瀟湘八景」系が15種類、混在したものが1種類なので、どちらかに偏っているわけではないことがわかる。また、10首一まとまりの題詩が22種類なのに対して、それ以外の数で一まとまりの題詩は10種類であることから、10首で一まとまりとする「十詠」「十景」が一般的だったことが言える。「景」の題詩については「瀟湘八景」と同様の「八景」詩も含まれていたが、その数は2種類と少なかった。また「瀟湘八景」系の題を持つ15種類の題詩についても、そのうちの12種類が10首一まとまりで構成されていた。中でも「景」の名称を冠している「瀟湘八景」系の題詩

については、8首一まとまりなものは2種類であったのに対して、10首一まとまりなものは9種類あり圧倒的に多い。このことから、寺院で詠まれた題詩については、題の種類が「境致」系と「瀟湘八景」系のどちらの場合でも10首で一まとまりとする形式が最も一般的であったと考えられる。

上述した寺院は、五山寺院をはじめとして殆ど全てが禅宗の寺院であったが、廣濟寺（北京市。現在の弘慈広濟寺）だけは禅宗寺院ではない。題詩は十景詩と題された「瀟湘八景」系の10首一まとまりのもので「題詠」の章に収録されているが、それ以外に巻頭には10題それぞれの景観図が収録されている^{xix}。これを見ると10題の景すべてが寺域内の情景を描写したものであることがわかる。

5. 「詠」「景」「境」について文字の音声による違いの分析

それでは「詠」「景」「境」は、上述の『阿育王寺志』に収録されていた10首の題詩3種類（「十詠」と、その次韻詩である「十境」、「十景」）に見られるように、混同されて使用されていたと言えるのであろうか。先にも述べたように『中國佛寺志』全巻に収録されていた題詩の中で「十境」詩は『阿育王寺志』の「次十境韻」詩だけであった。しかし「十詠」詩や「十景」詩は数多くの例が見いだせるので、10首一まとまりの題詩を詠むことは盛んに行われていたようである。そのため、中国の寺院では、特化した形式の下で十境詩を詠むということが日本の禅宗寺院のように盛んには行われていなかったのかもしれない。或いは、「詠」「景」「境」のいずれを使用しても同じような意味合いで受け止められていたのだろうか。そこで「詠」「景」「境」の3字は、音や意味から混同しやすい文字であるのかを検証した。（中古音、『中原音韻』音は藤堂明保編『学研和漢大字典』2001年版に依った）

それぞれの文字の字音：

境《上梗》jìng（現代音）- kɿŋɣ（中古音）- kiəŋ（『中原音韻』）

景 ⊖《上梗》jǐng（現代音）- kɿŋɣ（中古音）- kiəŋ（『中原音韻』）

㊦《上梗》yǐng (影) - ɿŋ (中古音) - iəŋ (『中原音韻』)

詠《去敬》yǒng (現代音) - ɦuŋ (中古音) - iŋ (『中原音韻』)

これをみると、現代音では「境」と「景」の㊦で、どちらの文字も jing と発音されており、違いは母音【i】の声調であることがわかる。「境」の母音は第四声の【i̇】、「景」の母音は第三声の【i̋】なので、単語を発音する時のアクセントには明らかな違いがある。中古音や『中原音韻』ではアクセントの位置が明確ではないが、「境」と「景」はどの時代においても殆ど同音であったことがわかる。「詠」については、中古音の母音【i̋】【ɿ】と子音【ŋ】が、また『中原音韻』の母音【i̋】と子音【ŋ】が「境」「景」と共通している。ただし中古音では【ű】が【i̋】と【ɿ】の間に入っているし、『中原音韻』では母音が【ő】である。以上の事柄から、「境」「景」「詠」の3文字は比較的近い音で発音される文字ではあるが、「境」と「景」が近似しているのと比較して「詠」との共通性は多くないと言える。

中国禅宗寺院で詠まれた題詩は、種類別に分類すると「景」を冠した題詩が最も数多く詠まれていたことがわかるが、「景」の題詩は「詠」（または「境」）の題詩と比較すると一まとまりにされる数も様々で、題の種類も「境致」系と「瀟湘八景」系が混在している。このため考えられるのは、先ず「景」を冠した題詩が詠まれて、その中の「十景」が視覚からではなく聴覚から混同されて、次第に別の文字を冠した題詩が詠まれるようになったということである。『中原音韻』に依る音声为例に取ると、「十景」の㊦【ʃɿi iəŋ】の音声は「十詠」【ʃɿi iŋ】と混同されやすいと考えられるし、「十景」㊦【ʃɿi kiəŋ】の音声は「十境」【ʃɿi kiəŋ】と混同されたために「十境」という名称が使用されるようになったという仮説が立てられる。それを裏付ける例として北宋の禅僧であった覚範恵洪（1071 - 1128）の『石門文字禪』巻八に収録されている「瀟湘八景」詩の序が挙げられる。そこには「宋廸作八境絶妙人謂之無聲句演上人戲余曰道人能作有聲乎因爲之各賦一首^{xx}」と書かれている。この中で覚範恵洪は、宋廸（11世紀後半）の瀟湘八景図と詩の関係を説いているが、「八景」のことが「八境」と表現

されているのがわかる。この例をみても、「景」と「境」は混同されて使用されることが少なからずあったと言えるだろう。

しかし、上記の考えでは『明州阿育王山志』と『明州阿育王山續志』に収録されていた3種類の題詩の作成順序の説明がつかない。『明州阿育王山志』『明州阿育王山續志』によると、これらの3種類の題詩は先ず、樂長卿の「育王山十詠」が詠まれ、次に阿育王寺第八十代住持、釋自學の「次十境韻」、続いて同じく阿育王寺第八十四代住持、清源本の「次十景韻」が「育王山十詠」詩の次韻詩とさらにその次韻詩として詠まれている。何故「十詠」の次韻詩が「十境」になり、その「十境」の次韻詩が「十景」になったのかは明確ではないが、この場合では「十詠」【ʃɿi iŋ】が「十景」2種類の音声という中継を経ずに「十境」【ʃɿi kiəŋ】に変化したことになるので、先に行った音声による文字の混同という説では説明が付けられない。何故なら、これまで行ってきた検討では「景」と「詠」との混同、或いは「景」と「境」との混同に対しては音声が類似しているためという説明を付けてきたが、先に挙げた「阿育王山十詠」に対して詠まれた次韻詩が何故「次十境韻」という名称になったのかは、この検討では説明できない。「景」を介さないで「詠」【iŋ】と「境」【kiəŋ】の音声が混同されたということは考えにくいからである。

蔡敦達は、その論文『中世の禅院空間に関する研究』で、中国五山寺院では『佛寺志』の記載に、「境致」という単語の代わりに「景致」という単語を同じ意味として使用しているのではないかと述べている。「景致」という単語については、『中國佛寺志』全文中14寺志の本文中にそれぞれ一か所ずつ計14回の記載が確認できる。しかし、それらが使用されている文章の文脈を検証すると、例えば『靈隱寺志』では晦山戒顯（1610 - 1672）の「募化纂石増靈隱山門景致疏」と題された一文が収録されており、続く文章は靈隱寺の景勝地について述べられたものであることが確認できる^{xxi}。このように「景致」という単語は景観、景勝といった意味で使用されていると考えられ、日本の禅宗寺院において意味付けされ、使用されていた「境致」という単語と同義語として使用されたとは考えられない。漢字の意味を見ると、

「境」：①さかい、境界。くぎり目。「国境」②さかい

の内側。しきられた地域。領地。③ところ。場所。「異境」④場合。めぐりあわせ。地位。「境遇」⑤ありさま。様子。「心境」

「景」：☉①ひかり、ひざし、日光。②あきらか（明）。③けしき。ながめ。「勝景」④ありさま。様子。おもむき。風情。⑤あおぐ（仰）。したう（慕）。⑥めでたい。⇒慶。⑦おおきい。堂々としている。⑧おだやか。☉かげ。光により生ずるかげ。⇒影。（『新漢語林』大修館書店）

とあり、2つの文字の持つ意味の違いは混同される要素が多いとはいえない。このことから『佛寺志』で「境致」と同じ意味で「景致」という単語を使用していたと断言するのは難しいのではないかと考える。

6. 中国南宋五山寺院の「境致」についての中国と日本の史料比較

以上の分析から、中国の禅宗寺院について書かれた中国語の史料には、日本で書かれた禅宗寺院についての史料とは異なり、「境致」或いは「十境」詩についての記述が殆ど残されていないということが明らかになった。しかし日本における「境致」選定や「十境」詩の作成は、中国（特に南宋）の禅宗寺院の風習を取り入れたことで日本に定着、広まったと考えられている。玉村竹二校訂の『扶桑五山記』解説には「本書の大略の性格は題名の通り、日本の京都・鎌倉の五山の住持歴代や、境致（境内の目ぼしい建築や山水木石）諸塔頭・寮舎などを記し、さらにこれに付随して、中国の五山・十刹・甲刹の開山・住持歴代・境致、日本の十刹・諸山の一覧、五山・十刹の位次の變遷などを併記してあるものである^{xiii}」とあり、『扶桑五山記』に中国禅宗寺院の「境致」が記載されていると説明されている。

『扶桑五山記』は江戸時代中期の享保七～八年（1722～23）の間に作成された写本で、五卷五冊からなっている。第一卷には「大宋國諸寺次位」と題して、中国の五山・十刹・甲刹の所在地・住持次位と共に、境致と考えられるものが挙げられている（ただし、これらは第二卷の日本五山寺院の場合とは異なり、「境致」と記載された項目にまとめられているわけではない）。第二卷は、前半には日本の五山・十刹の次位の變遷、そして諸山の所在国・開山が記載されている。後半は、京都・鎌

倉の五山の仏殿上梁銘・境致・塔頭・住持次位の記載がはじまり、その第一位南禅寺についてまでが収録されている。そして第三卷以下に、南禅寺以外の京都・鎌倉五山寺院について収録されている。ただ「境致」については、日本の五山寺院の中にも記載のない寺院が存在し、反対に十刹・諸山の寺院に関しては、殆どの寺院で記載がない中で幾つかの寺院には「境致」という項目が設けられて記載されていた。日本の寺院の中で「境致」の記載が明確であるのは、京都・鎌倉の五山寺院のうち、京都の萬寿寺と鎌倉の浄妙寺を除く9寺（ただし萬寿寺には東漸和尚作の「萬壽十境偈」の記載がある）と、十刹の大慈寺、諸山の三河州光音禅寺、大隈州正興禅寺、薩摩州廣濟禅寺、豊後州大智寺の五寺であった。

また『扶桑五山記』と同種の「禅刹記」に『和漢禅刹次第』があるが、これも『扶桑五山記』と同様に中国五山寺院の所在地・開山・住持歴代（元代末期頃迄）・境致（『扶桑五山記』同様「境致」の語は記載されていない）と十刹・甲刹の所在地・開山・境致を挙げ、さらに、京都と鎌倉の五山・十刹の次位の變遷と諸山の一覧及びその所在地・開山・境致が挙げられており、その内容は殆ど変らない。

ここに挙げた文献史料では、中国禅宗寺院についての記述で、中国で編纂された『中國佛寺志』と日本で編纂された『扶桑五山記』や『和漢禅刹次第』といった「禅刹記^{xiii}」における「境致」の記述に違いがみられた。そもそも『中國佛寺志』においては、「境致」の記述は見つからず、「十境」詩も阿育王寺の「次十境韻」のみであった。また日本の「禅刹記」では、京都・鎌倉の五山寺院や十刹・諸山の幾つかに「境致」の記載があったが、中国五山寺院については、境致に該当すると考えられる題が「境致」とは明記されずに列挙してあるだけであった。

以上のことから、中国禅宗寺院では、「境致」という語が一般的に使用されていたわけではなかったということが考えられる。そこで『中國佛寺志』に記載されていた「複数にまとまった題詩（主に10題でまとめられているもの）」の題と『扶桑五山記』や『和漢禅刹次第』に記載されている「境致」と考えられる題をそれぞれの寺院毎に比較、類別することで、中国と日本の題がそれぞれ持つ特徴や共通性が明らかになると考えた。

(1) 萬寿寺

中国：「喝石（巖）」「凌霄（閣・庵）」「含暉亭」「靈雞塚」（4）

「堆珠峰」「大人峰」「鵬博峰」「宴坐峰」「朝陽峰」（5）

日本：「清涼法海」（山門）「龍井（一穴）」「天下徑山」（総門）「五髻峯」「龍淵室」（方丈）「淨髮閣」「不動巖」「不動軒」（方丈、法堂以方丈兼）「凌霄峯」「凌霄閣」「含暉亭」「御愛峯」「喝石巖」「楞伽室」「流止亭」「福地」「靈鷲塚」「鉢盂峯」「碁盤石」「萬年正續院」（無準塔）（20）（『徑山志』と共通する題には下線）

萬寿寺については、『扶桑五山記』には「境致」と考えられる20種類の題の記載があった。『中國佛寺志』に記載されていた題詩のうち、『扶桑五山記』に挙げられている題と共通しているものは4種類あったが、いずれも単独で詠まれた詩と考えられる。

また『中國佛寺志』に収録されていた題詩の中には、同一作者によって「峰」に対して詠まれた五種類の題詩が収録されていた。これらは、五言古詩（六句）で詠まれた「堆珠峰」「大人峰」「鵬博峰」「宴坐峰」「朝陽峰」の五題であるが、どれも『扶桑五山記』の題には含まれていない。しかし『扶桑五山記』の題の中にも「五髻峯」「凌霄峯」「御愛峯」「鉢盂峯」と、四種類の「峯」が含まれており、「峰」や「峯」が題詩の重要な主題の一つであったことが伺える。

中国：「堆珠峰」「大人峰」「鵬博峰」「宴坐峰」「朝陽峰」

日本：「五髻峯」「凌霄峯」「御愛峯」「鉢盂峯」

(2) 靈隱寺

中国：「本寺（靈隱寺）」「冷泉亭」「飛來峰」「曲水亭」「龍泓洞」「蓮華石」「猿呼洞」「北高峰（塔）」「九里松」「合澗橋」「石門澗」「靈隱浦」「葛塢」「韜光菴」「西菴」「臥犀泉」「青林洞」「白沙泉」「翻經臺」「蓮花峰」「鍊丹井」「水臺盤」「翻經臺」「葛洪井」「連巖棧」「飯猿臺」「夢謝亭」「理公巖」「題名塔」（29）

日本：「蜚來峯」「冷泉亭」「猿呼洞（白猿洞）」「北高峰」「合澗橋」「九里松徑」「直指堂」「石蓮峯」「壑雷亭」「鷲嶺」「蓮峯堂」「梅檀林」（12）（『靈隱寺志』と共通する題には下線）

靈隱寺では『中國佛寺志』に記載されていた29種の題のうちの6種類が『扶桑五山記』と共通していた。『扶桑五山記』には12種類の題が記載されていたので、『扶桑五山記』に記載されていた題の丁度半数が『中國佛寺志』にも記載されていたことになる。共通する6種類は「峯」「亭」「洞」「橋」「松（徑）」で、建造物と自然物が混在しているが、その他の題と比較して目立った特徴があるわけではない。

(3) 天童寺

中国：「太白峰」「太白庵」「玲瓏巖」「響石」「神龍霽」「虎跑泉」「佛蹟石」「臨雲閣」「春樂軒」「宿鷲亭」「太白山」「蒙堂」（12）（舒宣の題詩12題、『扶桑五山記』と共通する題には下線）

日本：「五鳳樓」（千仏閣）「光明藏」「九峯」「龍潭」「玲瓏巖」「雙沼」「宿鷲亭」「清關」「萬松關」「萬工池」「登閣」「妙高臺」「翠鎖亭」「門外二十里松徑」「虎跑泉」「太白禪居」（16）

天童寺では『中國佛寺志』に記載されていた舒宣の題詩12種類のうち3種類が『扶桑五山記』の題と共通していた。『扶桑五山記』には16種類の題が記載されていたので、そのうちの13種類が『中國佛寺志』には記載のない題である。反対に、『南遊集』に収録されている別源円旨の「和雲外和尚天童十境韻」の10題は全て『扶桑五山記』の16種類の中に含まれていた（「萬松關」「翠鎖亭」「宿鷲亭」「清關」「萬工池」「登閣」「玲瓏巖」「虎跑泉」「龍潭」「太白禪居」）。このことから、中国で中国人によって詠まれた題詩と日本人によって書かれた書物に収録されている題・題詩では、かなりの違いがみられるということがわかる。

(4) 淨慈寺

中国：(0)

日本：「南屏山」（南屏峯）「慧月山」「南高峰」「六

和塔」(后山)「枯木堂」(僧堂)「宗鏡堂」(法堂)
「六橋」「西湖」「千峯閣」「羅漢堂」「正偏知閣」「霜
花巖」(12)

浄慈寺では『中國佛寺志』には「境致」系の題詩が収録されていなかったことから、『扶桑五山記』など日本で編纂された史料にしか「境致」の記載は見られない。

(5) 阿育王寺

中国：「舍利塔」「望海亭」「無畏堂」「淵靈廟」「玉几峰」「金沙井」「仙書岩」「佛石」「七沸潭」「大權洞」「承恩閣」「涌現巖」「妙喜泉」「金沙池」「佛跡峯」「七沸石」「袈裟衣」「名月臺」「石屏峯」「靈鰻井」「供奉泉」「育王塔」「八角殿」「晉年札」「重臺蓮」「佛跡岩」「宸奎閣」「放光松」「赤菴峰」「佛蹟亭」「鬼谷祠」「袈裟石」(31) (『扶桑五山記』と完全または部分的に一致しているものには下線)

日本：「玉几峯」「玉几亭」「無畏堂」「妙喜泉」「鄮峰」「舍利道場(妙勝之殿)」「靈鰻池」(7)

阿育王寺では『中國佛寺志』に記載されていた31種類の題のうち『扶桑五山記』に記載されていたと7種類の題と完全に一致していたのは3種類だけであった。『阿育王寺志』には比較的多くのまとまった題詩が収録されていたが、それぞれの題は共通していないものも多く、題詩は合計で31種類にも上った。それにもかかわらず『扶桑五山記』の7種類の題のうち3種類しか共通していないのは決して多いとは言えない。ただ、完全には一致していないが共通の題と考えられるものが2種類あった(「舍利塔」「靈鰻井」)。反対に、7種類のうちで共通ではなかった題は「玉几亭」と「鄮峰」の2種類だけであった。

(6) 小結

『中國佛寺志』の五山寺院の中で、一定数でまとめられた題詩が収録されていたのは、靈隱寺・天童寺・阿育王寺の3寺であったが、いずれの例をみても『扶桑五山記』や『和漢禪刹次第』といった日本で編纂された史料に記載されていた「境致」と考えられる題と完全に一致しているものはなかった。

はじめに靈隱寺では、5種類のまとまった題詩が収録されていたが、それぞれが全く異なった題を含んでいる。これは、「瀟湘八景」詩に見られるような特定の題が定着していたというよりは、数ある景観の中から作者が自らの好みで選択し、まとめたものであると推測される。題として選ばれていた景観は合計で29種類あったが、その中で『扶桑五山記』に収録されていたものは6種類しかない。わかりやすい例として挙げられるものに、「靈隱十詠」と「靈隱十景」という題詩2種類がある。これらはいずれも10題のまとまった題詩を集めたものだが、この2種類の題詩でそれぞれ選ばれている題が共通しているのは「猿呼洞」「蓮花峰」「龍泓洞」の3種類だけであった。また、この2種類の題詩それぞれの『扶桑五山記』(「境致」として挙げられているのは12種類)との比較をみると、「靈隱十詠」では「冷泉亭」「飛來峰」「猿呼洞」の3種類が共通しており、他に「高峰塔」が類似している。また「靈隱十景」の方は、「猿呼洞」と「合潤橋」の合計2題が共通していることがわかった。これに対して『扶桑五山記』に「境致」として挙げられていたもので「靈隱十詠」と「靈隱十景」には含まれていなかった題は「北高峯」「九里松徑」「直指堂」「石蓮峯」「壑雷亭」「鷺嶺」「蓮峯堂」「梅檀林」の8種類(ただし「北高峯」は類似の題有り)で、中でも「直指堂」と「梅檀林」は、単独の詩詠にも詠まれてはいなかった。

次に天童寺では、『天童寺志』にはまとまった形での収録はされていなかったが、舒宣によって詠まれた10種類の題詩が収録されていた。これらの題詩は、舒宣の『乾道四明図經』の中では「天童十題」としてまとまった形で収録されている。この題の中で『扶桑五山記』(「境致」として挙げられているのは16種類)と共通しているのは「玲瓏巖」「虎跑泉」「宿鷺亭」「太白庵」(ただし『扶桑五山記』での記述は「太白禪居」)の4種類だけであった。これに対して『扶桑五山記』に挙げられていた題で「天童十題」に含まれていなかったものは「五鳳樓」「光明藏」「九峯」「龍潭」「雙沼」「清關」「萬松關」「萬工池」「登閣」「妙高臺」「翠鎖亭」「門外二十里松徑」の12種類であった。

最後に阿育王寺では、5種類のまとまった題詩が収録されていたが(「阿育王四景」「育王山十詠」「和育王

十二題」「次十境韻・次十景韻」及び、釋岷荃によって詠まれた10首）、この5種類の中で『扶桑五山記』（「境致として挙げられているのは7種類」と完全に一致しているものはなかった。「阿育王四景」では「舍利塔」（ただし『扶桑五山記』では「舍利道場」）と「無畏堂」と4種類中の2種類、「和育王十二題」では「靈鰻井」（ただし『扶桑五山記』では「靈鰻池」）と12種類中1種類しか共通していなかった。また10首で一まとまりになっている題詩では、「育王山十詠」で「舍利塔」（ただし『扶桑五山記』では「舍利道場」）と「玉几峰」の2種類、「次十境韻・次十景韻」では「舍利塔」「妙喜泉」「玉几峯」の3種類、そして釋岷荃の10首では「玉几峰」と「妙喜泉」の2種類だけであった。それに対して『扶桑五山記』に挙げられた上記の5種類のまとまった題詩のいずれにも含まれていなかったのは「玉几亭」「鄧峰」の2種類だけであった。

7. おわりに

日本では鎌倉時代から禅宗寺院を中心に、そして室町時代になると武家や貴族の邸宅においても「境致」選定や、それに伴った「十境」詩を作成することが盛んになっていった。この習慣は、日本における禅宗の五山制度が南宋五山に倣って導入された経緯から、制度に付随する形で中国から日本にもたらされたと考えられている。例えば関口欣也はその著書で、日本の禅宗寺院が五山制度を取り入れた時に制度の一環として境致の概念も導入されたとし、鎌倉五山寺院に見られる自然景観と建築群および人工的環境形成の総合美が、中国宋代の禅宗寺院における「境致」の概念に因るものであると述べている

xxiv。

確かに、『五山文学』に残る漢詩の様式・形式を見ると、中国の禅僧達が詠んでいた詩偈の影響を強く受けていることは間違いない。そのため本論文では、「境致」選定や「十境」詩の作成の習慣がどこでどのようににはじまったのかを明らかにするために、中国の文献史料から「十境」詩を探し出すことを試みた。中国宋代の禅宗寺院についての史料はそれほど多いとは言えず、中国禅宗寺院において「境致」の選定が慣習的に行われていたという確かな文献史料は見つからなかった。本論文で使用した『中國佛寺志』は、明代から清代に数多く編纂され

た中国の地方誌を扱う文献史料の一つである。その主な内容は寺院の歴史沿革、所在地や地理環境、伽藍建築、高僧伝、法語や詩偈、法脈、伝承、感応事跡、風俗などである。

この史料から、中国の五山寺院をはじめとする禅宗寺院で詠まれた「一定数にまとめられた題詩」を探し出し分析した結果は上述の通りである。最初に、対象を南宋五山寺院の五寺だけに絞り、『徑山志』『武林靈隱寺志』『雲林寺志』『天童寺志』『勅建淨慈寺志』『明州阿育王山志』『明州阿育王山續志』の中に収録されている「一定数にまとめられた題詩」を拾い出した。その上でそれらの題詩の題を分類し、『扶桑五山記』に記載されている南宋五山寺院の「境致」と考えられる題と比較した。

次に、五山寺院以外の寺院では、「境致」や「十境」の記載がどの程度確認できるのか、或いは「景」「詠」「題」などとの併記がみられるのかを確認するために、先程と同様に『中國仏寺志彙刊』の五山寺院以外の全ての巻を史料として、「境」「景」「詠」「題」などの題詩の拾い出しを行い、箇条書き形式でまとめて、五山寺院の場合と同様の分析を行った。その結果、中国語の文献では一定数にまとめられた題詩は頻繁に見られるにもかかわらず、それらに使用される名称は「景」や「詠」であり、「境致」や「十境」という語が極めて稀にしか使用されていないことが明らかとなった。以上のことから「詠」、「景」、「境」の3文字が混同されやすい文字であるかを検証した。例えば『阿育王寺志』に収録されていた10首の題詩：「十詠」と、その次韻詩である「十境」、「十景」に見られるように、「詠」、「景」、「境」は同じような意味合いを持ち、混同して使用されたと考えることが可能かを検証することとした。そのため「詠」「景」「境」の3字は、音や意味から混同しやすい文字であるのかを検証した。

以上のことを検証した結果、中国禅宗寺院では、「境致」という語が一般的に使用されていたわけではなかったということが考えられた。そこで最後に、『中國佛寺志』に記載されていた「複数にまとまった題詩（主に10題でまとめられているもの）」の題と『扶桑五山記』や『和漢禪刹次第』に記載されている「境致」と考えられる題を、五山寺院の資料に絞って比較、類別し、中国と

日本の題がそれぞれ持つ特徴や共通性を明確にしようと試みた。

以上の結果、『中國佛寺志』の史料からは、「境致」や「十境」詩はほとんど見つけることができなかった。唯一記載のあった『明州阿育王山續志』の「次十境韻」という次韻詩についても、その10首の題のうち『扶桑五山記』に挙げられていた7題と共通していたのは3首だけであった。『中國佛寺志』には「境致」以外の題詩は数多く収録されており、中国禅宗寺院において、寺院とその周辺の景観に対して佳名を付けて詩を詠むという習慣が一般的であったことは確かである。それにもかかわらず、「境致」や「十境」という語彙を使用しているのは全体を通して一例だけであった。それは、このような形式の題詩を作成する時に「境致」や「十境」という概念で景観を捉えるということが、我々が考えているほど普及していたわけではなかったという理由からくるのではないだろうか。

上述したように、日本で編纂された『扶桑五山記』や『和漢禅刹次第』に記載されている、「中国禅宗寺院の境致」と考えられている題について、『中國佛寺志彙刊』の内容とは一致していないということがわかった。『中國佛寺志彙刊』の各寺院志には「境致」という語彙が使用されている例がないことや、さらに「境致」と同意語として使用されていると推測できるような語彙も確認できなかった。また、「十境」詩については全巻中で唯一の例を『明州阿育王山續志』に確認したが、推測できる成立年代は、日本の禅宗寺院で「十境」詩の作成が既に一般化した後であることが明らかになった。このため、『扶桑五山記』や『和漢禅刹次第』といった「禪刹記」系史料の、南宋五山寺院の項に記載されている「境致」と考えられる題が、どのような経緯を経て記述されたものであるのかが明確にできない。またはそれ以前に、日本の禅宗寺院が中国から取り入れたと考えられている「境致」選定と「十境」詩詠が、本当に中国禅宗寺院でも行われていたのかということについても、現段階において確信を持つことができない。またそうであるならば、日本の禅宗寺院における「境致」選定の定着と普及については、中国の南宋五山制度を導入した時に同時に輸入された概念という今までの解説だけでは説明が付かず、その起源をより明確にする方法も今後検討していかなければ

ならない。本論文を作成するために中国の文献史料をことごとく調べたわけではないので、現時点で「中国禅宗寺院には「境致」が存在しない」と断定することはできない。しかし「仏寺志」と銘打たれた史料に記載される内容は、それ以外の文献と比較して、仏教寺院についての記述がより豊富であろうと想像できるので、その史料の中に確認できなかったということは留意すべき点ではないかと考える。

謝辞

本論文は、京都造形芸術大学博士課程に於いて仲隆裕教授の指導の下に作成しました。ここに御礼申し上げます。

-
- i 田島柏堂 1981「天童山十境」と禅語散策 - 「拜登」・「警策」考 - 、『禅研究所紀要』第11号、愛知学院大学禅研究所、108頁
 - ii 同上、111頁
 - iii 同上、112頁
 - iv 関口欣也 1982「中国江南の大禅院と南宋五山」『仏教芸術』144号、毎日新聞社、38頁
 - v 同上、38頁
 - vi 関口欣也 1991「中世五山伽藍の源流と展開」『新編名宝日本の美術 第15巻 五山と禅院』小学館、124頁
 - vii 同上、137頁
 - viii 蔡敦達 2001「日本の禅院における中国的要素の摂取：十境を中心として」『国際日本文化研究センター紀要23』、15頁
 - ix 同上、17頁
 - x 同上、18頁
 - xi 玉村竹二 2002「禅院の境致一特に楼閣・廊橋について」横山正編『叢書 禅と日本文化』第五巻 禅と建築・庭園、ペリカン社、78頁
 - xii 明文書局編集部編『靈隠寺志』巻八、詩詠、五言古、509頁
 - xiii 明文書局編集部編『靈隠寺志』巻五下、歴代人物、274頁
 - xiv 中華電子佛典協會編、卍新纂續藏經 Vol.72、No.1431『雲外和尚語録』、17頁
 - xv 明文書局編集部編『勅建浄慈寺志』巻首二、87頁
 - xvi 同上、88頁
 - xvii 同上、88頁
 - xviii 明文書局編集部編『明州阿育王山續志』巻六、876頁
 - xix 明文書局編集部編『勅建弘慈廣濟寺新志』6—24頁

- xx 宋釋徳洪撰、宋釋覺慈輯 1664『石門文字禪 三、四』
田原仁左衛門刊、29 頁
- xxi 明文書局編輯部編『靈隠寺志』卷七、疏、436 頁
- xxii 玉村竹二校『扶桑五山記』、1 頁
- xxiii 同上、1 頁
- xxiv 関口欣也 1991「中世五山伽藍の源流と展開」『新編
名宝日本の美術 第15巻 五山と禅院』、小学館、137
頁、166 頁

参考文献

1. 田島柏堂 1981「「天童山十境」と禅語散策 - 「拜登」・
「警策」考 - 」『禅研究所紀要』第11号、愛知学院大
学禅研究所
2. 関口欣也 1982「中国江南の大禅院と南宋五山」『仏
教芸術』144号、毎日新聞社
3. 関口欣也 1991「中世五山伽藍の源流と展開」『新編
名宝日本の美術 第15巻 五山と禅院』小学館
4. 蔡敦達 2001「日本の禅院における中国的要素の撰
取：十境を中心として」『国際日本文化研究センター
紀要23』国際日本文化センター
5. 玉村竹二校 1961『扶桑五山記』鎌倉市教育委員会
6. 玉村竹二 2002「禅院の境致一特に楼閣・廊橋について」
横山正編『叢書 禅と日本文化』第五巻 禅と建築・
庭園、ペリカン社